
蓮 田 市

荒川附遺跡Ⅲ

県道上尾蓮田線建設事業関係埋蔵文化財発掘調査報告

2014

埼 玉 県

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



1 荒川附遺跡 21 次第 9 号住居跡出土遺物



2 荒川附遺跡 23 次第 1 号住居跡出土遺物

序

埼玉県は、埼玉県5か年計画において、「安心の確立、成長の実現、そして自立自尊の埼玉へ」という指針を掲げ、県民の安心・安全の確保や利便性の向上、産業の活性化などを目指し、道路など社会基盤の整備を行っています。

蓮田市内に計画された県道上尾蓮田線の整備工事もその一環であります。事業地内には、これまでの発掘調査によって、古墳、奈良、平安時代の大規模な集落跡である荒川附遺跡が存在することが知られています。今回の調査は埼玉県杉戸県土整備事務所の委託を受け、道路整備のための事前調査として当事業団が実施いたしました。

発掘調査の結果、古墳時代後期から平安時代（1100～1400年前）の住居跡や、鉄器を製作した工房跡（鍛冶工房跡）、土師器を焼いた窯跡（土器焼成域）、江戸時代の溝跡や道路跡などが発見されました。今回の調査によって、荒川附遺跡は、古代の「ものづくり」の中心的な集落であったことが分かりました。

本書は、これらの発掘調査の成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護並びに普及・啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として、多くの方々に活用していただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、発掘調査の諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課をはじめ、埼玉県杉戸県土整備事務所、蓮田市教育委員会並びに地元関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

平成 26 年 3 月

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理 事 長 中 村 英 樹

例 言

1. 本書は蓮田市に所在する荒川附遺跡第21・23・27次調査の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の略号と代表地番、発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。
荒川附遺跡第21次（ARKWDK 21次）
蓮田市関山3丁目3484－3番地他
平成16年1月29日付け教文第2－86号
荒川附遺跡第23次（ARKWDK 23次）
蓮田市関山3丁目3454－3番地他
平成21年2月14日付け教文第2－79号
荒川附遺跡第27次（ARKWDK 27次）
蓮田市関山3丁目3474－21番地他
平成25年11月1日付け教文第2－42号
3. 発掘調査は、県道上尾蓮田線建設事業に先立つ埋蔵文化財記録保存のための事前調査である。埼玉県教育庁生涯学習部文化財保護課（平成15年度当時）が調整し、埼玉県県土整備部道路街路課の委託を受け、財団法人（現在 公益財団法人）埼玉埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 各事業の委託事業名は、下記のとおりである。
発掘調査事業（平成15・20・25年度）
「県道上尾蓮田線建設事業（蓮田市地内）関係埋蔵文化財発掘調査」（平成15年度、第21次）
「県道上尾蓮田線（蓮田市地内）埋蔵文化財発掘調査委託」（平成20年度、第23次）
「地特（改築）工事（上尾蓮田線・埋蔵文化財発掘調査業務委託）」（平成25年度、第27次）
整理報告書作成事業（平成25年度）
「地特（改築）工事（上尾蓮田線・埋蔵文化財整理業務委託）」
5. 発掘調査・整理報告書作成事業はI－3に示した組織により実施した。
発掘調査は、第21次を平成15年12月19日から平成16年3月24日まで富田和夫、田代雄介が、第23次を平成21年2月9日から平成21年3月24日まで金子直行、細田勝が、第27次調査を平成25年10月1日から平成25年10月31日まで赤熊浩一、魚水環が担当した。
整理報告書作成事業は、平成25年12月2日から平成26年3月31日まで実施し、福田聖が担当した。報告書は、平成26年3月25日に埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第411集として印刷・刊行した。
6. 発掘調査における基準点測量は（株）GIS関東、（有）埼京コンサルタントに委託した。
7. 発掘調査における写真撮影は金子、富田、細田、赤熊、田代、魚水が行い、出土遺物の写真撮影は福田が行った。
8. 出土品の整理・図版作成は福田が行った。
9. 本書の執筆は、I－1を埼玉県教育庁市町村支援部生涯学習文化財課が、Ⅶの6を大屋道則が、その他を福田が行った。
10. 本書の編集は福田が行った。
11. 本書にかかる諸資料は平成26年4月以降、埼玉県教育委員会が管理・保管する。
12. 発掘調査や本書の作成にあたり、下記の方々、蓮田市教育委員会、関係機関の皆様から御教示・御協力を賜った。記して感謝いたします（敬称略五十音順）。
大塚孝司 奥野麦生 黒沢和彦 小宮雪晴
田中和之 寺内正明

凡 例

1. 第21次・23次調査については、蓮田市教育委員会の調査回数と重複するため、特に必要のある場合には、事業団21次、23次と表記した。
2. 遺跡全体におけるX・Yの数値は、日本測地系（旧測地系）、国家標準平面直角座標第Ⅸ系（原点北緯36° 00′ 00″、東経139° 50′ 00″）に基づく座標値を示す。また、各挿図に記した方位は全て座標北を指す。

C-17グリッド北西杭の座標は、 $X = -1420.000 \text{ m}$ ・ $Y = -15920.000 \text{ m}$ 、北緯35° 59′ 13.4516″・東経139° 39′ 24.3206″である。

C-17グリッドの世界測地系による換算値は、 $X = -1065.063 \text{ m}$ ・ $Y = -16212.966 \text{ m}$ 、北緯35° 59′ 24.95607″・東経139° 39′ 12.67386″である。

また、第27次調査では世界測地系を用いた。第21・23次調査の座標との関係は第8図に示した。第27次調査B-3グリッド北西西杭の座標値は、 $X = -1110.000 \text{ m}$ ・ $Y = -16340.000 \text{ m}$ （世界系）である。日本測地系による換算値は $X = -1464.9304 \text{ m}$ ・ $Y = -16047.0414 \text{ m}$ 、北緯35° 59′ 11.9860″・東経139° 39′ 19.2512″である。

3. 調査に際して使用したグリッドは、国家標準平面直角座標に基づく10×10mの範囲を基本（1グリッド）とし、調査区全体をカバーする方眼を設定した。
4. グリッドの名称は、北西隅を基点に、北から南にA～J、西から東に1～10とし、表記は両者を組み合わせて、B-5グリッドとした。
5. 本書の本文・挿図・表・写真図版に記した遺構の略号は、以下のとおりである。
S J…住居跡 S K…土壇 S D…溝跡
S O…道路跡 P…ビット・柱穴

6. 本書における挿図は、一部の例外を除き以下の縮尺を原則とした。

全測図 1/250・1/800

遺構図 1/60・1/30

遺物実測図・拓写図・合成図 1/4・1/3・1/2

7. 遺物実測図の表記方法は以下のとおりである。
須恵器は断面を黒塗りした。また、彩色された土器はその範囲に網（赤彩10%）をかけて示した。

8. 遺構断面図に表記した水準数値は、全て海拔標高（単位m）を表す。

9. 遺物観察表の表記方法は以下のとおりである。

・器種は土師器、須恵器、陶器、磁器、中世土器、かわらけと表記した。

・遺物計測値は土器をcm、石製品をmm、重さをg単位とした。

・土器計測値の（ ）は復元推定値、[]は残存長を示す。

・胎土は特徴的な鉱物等を記号で示した。

A：雲母 B：片岩 C：角閃石 D：長石

E：石英 F：軽石 G：砂粒子 H：赤色粒子

I：白色粒子 J：針状物質 K：黒色粒子

L：その他 M：チャート

・焼成は良好・普通・不良の3段階に分けた。

・残存率は図示した器形に対する大まかな遺存程度を%で示した。

・備考には出土位置、注記No.、煤の付着、生産窯、年代等を記した。

10. 時期区分は、第338集「荒川附遺跡Ⅱ」による。

11. 本書に掲載した地形図類は国土地理院発行の1/50000地形図、蓮田市発行の1/2500都市計画図を編集のうえ、使用した。

12. 文中の引用文献等は、（著者 発行年）の順で表記し、その他の参考文献とともに巻末に掲載した。

目 次

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要	1	V 第23次調査の遺構と遺物	51
1. 発掘調査に至る経過	1	1. 住居跡	51
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2	2. 土壌	55
3. 発掘調査・報告書作成の組織	3	3. 溝跡	55
II 遺跡の立地と環境	4	4. ビット	57
1. 地理的環境	4	VI 第27次調査の遺構と遺物	57
2. 歴史的環境	4	1. 土壌	57
III 遺跡の概要	7	2. 溝跡	57
IV 第21次調査の遺構と遺物	14	3. ビット	59
1. 住居跡	14	4. グリッド出土の遺物	59
2. 鍛冶関連遺物	37	VII 調査のまとめ	60
3. 土壌	39	1. 調査の成果	60
4. 土器焼成域	41	2. 集落の変遷	60
5. 溝跡	43	3. 土器焼成域について	60
6. 道路跡	47	4. 鍛冶関連遺物について	62
7. ビット	49	5. 遺跡の性格	63
8. グリッド出土の遺物	50	6. 鍛造剥片について	63

写真図版

挿図目次

第1図	埼玉県の地形	4	第33図	第12号住居跡出土遺物	34
第2図	周辺の遺跡	6	第34図	第13号住居跡	35
第3図	調査地点位置図	8	第35図	第13号住居跡出土遺物	36
第4図	基本土層	9	第36図	住居跡出土石製品	36
第5図	荒川附遺跡全体図	10	第37図	鍛冶関連遺物	37
第6図	分割図(1)	11	第38図	鍛冶関連遺構	38
第7図	分割図(2)	12	第39図	第3～12・14号土城	40
第8図	分割図(3)	13	第40図	第7・9号土城出土遺物	40
第21次調査			第41図	第1・2・13号土城	41
第9図	第1号住居跡	14	第42図	第13号土城出土遺物	42
第10図	第1号住居跡遺物分布	15	第43図	第2号溝跡	45
第11図	第1号住居跡出土遺物(1)	16	第44図	第6号溝跡	46
第12図	第1号住居跡出土遺物(2)	17	第45図	第9号溝跡	46
第13図	第2・3号住居跡	19	第46図	溝跡出土遺物	46
第14図	第2号住居跡出土遺物	20	第47図	第1号道路跡出土遺物	47
第15図	第3号住居跡出土遺物	21	第48図	第1号道路跡	48
第16図	第4号住居跡	22	第49図	ビット出土遺物	50
第17図	第4号住居跡出土遺物	23	第50図	グリッド出土遺物	50
第18図	第5号住居跡	24	第23次調査		
第19図	第5号住居跡出土遺物	24	第51図	第1号住居跡	52
第20図	第6号住居跡	25	第52図	第1号住居跡カマド	53
第21図	第6号住居跡出土遺物	25	第53図	第1号住居跡出土遺物	54
第22図	第7号住居跡	26	第54図	第1・2号土城	55
第23図	第7号住居跡出土遺物	26	第55図	第1・2号溝跡	56
第24図	第8号住居跡	27	第27次調査		
第25図	第8号住居跡出土遺物	28	第56図	第1号土城	57
第26図	第9号住居跡	29	第57図	第1号溝跡	58
第27図	第9号住居跡出土遺物	30	第58図	第1号溝跡出土遺物	58
第28図	第10号住居跡	32	第59図	グリッド出土遺物	59
第29図	第10号住居跡出土遺物	32	第60図	荒川附遺跡VI～VIII期の住居跡分布	61
第30図	第11号住居跡	33	第61図	鍛造剥片の粒度別質量分布	64
第31図	第11号住居跡出土遺物	33	第62図	粒状滓の粒度別質量分布	64
第32図	第12号住居跡	34			

表 目 次

第 1 表	周辺の主要遺跡……………6	第 20 表	土器焼成域一覧表……………41
第 21 次調査		第 21 表	第 13 号土坑出土遺物観察表……………43
第 2 表	第 1 号住居跡出土遺物観察表……………18	第 22 表	溝跡一覧表……………44
第 3 表	第 2 号住居跡出土遺物観察表……………20	第 23 表	溝跡出土遺物観察表……………47
第 4 表	第 3 号住居跡出土遺物観察表……………21	第 24 表	第 1 号道路跡出土遺物観察表……………47
第 5 表	第 4 号住居跡出土遺物観察表……………22	第 25 表	ビット一覧表……………49
第 6 表	第 5 号住居跡出土遺物観察表……………24	第 26 表	ビット出土遺物観察表……………50
第 7 表	第 6 号住居跡出土遺物観察表……………25	第 27 表	グリッド出土遺物観察表……………50
第 8 表	第 7 号住居跡出土遺物観察表……………27	第 23 次調査	
第 9 表	第 8 号住居跡出土遺物観察表……………28	第 28 表	第 1 号住居跡出土遺物観察表……………53
第 10 表	第 9 号住居跡出土遺物観察表……………31	第 29 表	土坑一覧表……………55
第 11 表	第 10 号住居跡出土遺物観察表……………33	第 30 表	溝跡一覧表……………56
第 12 表	第 11 号住居跡出土遺物観察表……………33	第 31 表	ビット一覧表……………57
第 13 表	第 12 号住居跡出土遺物観察表……………35	第 27 次調査	
第 14 表	第 13 号住居跡出土遺物観察表……………36	第 32 表	第 1 号溝跡出土遺物観察表……………58
第 15 表	住居跡出土石製品観察表……………37	第 33 表	ビット一覧表……………59
第 16 表	鍛冶関連遺物観察表……………37	第 34 表	グリッド出土遺物観察表……………59
第 17 表	鍛冶関連遺物分類表……………38	第 35 表	荒川附遺跡の鍛冶関連遺物……………62
第 18 表	土坑一覧表……………39	第 36 表	抽出した鍛造剥片と粒状率の粒度別質量 ……………64
第 19 表	第 7・9 号土坑出土遺物観察表……………40		

写真図版目次

巻頭図版	1	荒川附遺跡 21 次第 9 号住居跡 出土遺物	5	21 次第 2・3 号住居跡 (西から)	
	2	荒川附遺跡 23 次第 1 号住居跡 出土遺物	6	21 次第 2・3 号住居跡 遺物出土状況 (南から)	
図版 1	1	21 次 A 区 (東から)	図版 5	7	21 次第 3 号住居跡遺物出土状況 (北から)
	2	21 次 B・C 区 (東から)		8	21 次第 4 号住居跡 (南から)
	3	21 次 B・C 区 (西から)		1	21 次第 4 号住居跡遺物出土状況 (南から)
	4	21 次 F 区 (西から) (1)		2	21 次第 4 号住居跡カマド (南から)
	5	21 次 F 区 (西から) (2)		3	21 次第 4 号住居跡カマド 遺物出土状況 (南から)
	6	21 次 G 区 (東から)		4	21 次第 5 号住居跡 (西から)
	7	21 次 H 区 (西から)		5	21 次第 6 号住居跡 (南から)
	8	21 次 J 区西側 (東から)		6	21 次第 6 号住居跡カマド (南から)
図版 2	1	21 次 K 区西側 (西から)	図版 6	7	21 次第 6 号住居跡遺物出土状況 (東から)
	2	21 次 L 区東側 (西から)		8	21 次第 7 号住居跡 (西から)
	3	21 次 L 区西側 (東から)		1	21 次第 7 号住居跡遺物出土状況 (東から)
	4	21 次 M 区西側 (西から)		2	21 次第 8 号住居跡 (南から)
	5	21 次 M 区東側 (東から)		3	21 次第 8 号住居跡入口部施設・ 硬化面 (南東から)
	6	21 次 N 区 (西から)		4	21 次第 9 号住居跡 (南から)
	7	23 次調査区 (西から)		5	21 次第 9 号住居跡 遺物出土状況 (1) (南西から)
	8	21 次 C 区 (東から)		6	21 次第 9 号住居跡 遺物出土状況 (2) (南西から)
図版 3	2	21 次 D 区南側 (東から)	図版 7	7	21 次第 9 号住居跡カマド (南西から)
	3	21 次 D 区北側 (東から)		8	21 次第 9 号住居跡カマド 遺物出土状況 (南西から)
	4	21 次 F 区 (西から)		1	21 次第 10 号住居跡 (北東から)
	5	21 次 I 区 (東から)		2	21 次第 10 号住居跡鍛冶炉・ ビット 1、第 13 号土壌 (南西から)
	6	21 次 J 区東側 (西から)			
	7	21 次 K 区東側 (西から)			
	8	21 次 L 区西側拡張部 (西から)			
	9	27 次調査区 (東から)			
	図版 4	1		21 次第 1 号住居跡 (東から)	
2		21 次第 1 号住居跡 遺物出土状況 (1) (東から)			
3		21 次第 1 号住居跡 遺物出土状況 (2) (東から)			
4		21 次第 1 号住居跡 遺物出土状況 (3) (東から)			

図版 8	3	21 次第 10 号住居跡鍛冶炉 (北西から)	7	21 次 L 区第 10 号溝跡 (西から)
	4	21 次第 10 号住居跡ビット 1 (鍛造剥片) (北西から)	図版 11	8 21 次 M 区第 1 号道路跡 (南西から)
	5	21 次第 11 号住居跡壁溝 (北から)	1	23 次第 1 号住居跡完掘 (西から)
	6	21 次第 12 号住居跡 (西から)	2	23 次第 1 号住居跡 (西から)
	7	21 次第 12 号住居跡 (東から)	3	23 次第 1 号住居跡 遺物出土状況 (1) (西から)
	8	21 次第 13 号住居跡 (西から)	4	23 次第 1 号住居跡 遺物出土状況 (2) (東から)
	1	21 次第 4 号土壇 (東から)	5	23 次第 1 号住居跡 遺物出土状況 (3) (北から)
	2	21 次第 5 号土壇 (西から)	6	23 次第 1 号住居跡カマド完掘 (南から)
3	21 次第 7 号土壇 (東から)	7	23 次第 1 号住居跡カマド、 第 1 号土壇 (南から)	
4	21 次第 9 号土壇 (南から)	8	23 次第 1 号住居跡カマド 遺物出土状況 (南から)	
図版 9	5	21 次第 10 号土壇 (西から)	図版 12	1 23 次第 1 号住居跡カマド半截 (南から)
	6	21 次第 14 号土壇 (南から)	2	23 次第 2 号土壇 (西から)
	7	21 次第 1 号土壇 (北から)	3	23 次第 1・2 号溝跡 (西から)
	8	21 次第 1 号土壇 炭化物分布状況 (1) (北から)	4	23 次第 1 号溝跡 (東から)
	1	21 次第 1 号土壇 炭化物分布状況 (2) (西から)	5	23 次第 2 号溝跡 (西から)
	2	21 次第 2 号土壇 (北西から)	6	27 次第 1 号土壇 (南から)
	3	21 次第 2 号土壇炭化物分布状況 (南東から)	7	27 次第 1 号溝跡全景 (西から)
	4	21 次第 13 号土壇 (北東から)	8	27 次第 1 号溝跡遺物出土状況 (西から)
図版 10	5	21 次第 13 号土壇遺物出土状況 (北東から)	図版 13	1 21 次第 1 号住居跡 (第 11 図 9)
	6	21 次第 13 号土壇炭化物分布状況・ 遺物出土状況 (北東から)	2	21 次第 2 号住居跡 (第 14 図 1)
	7	21 次 B・C 区第 1 号溝跡 (南から)	3	21 次第 2 号住居跡 (第 14 図 4)
	8	21 次 G 区第 2 号溝跡 (1) (西から)	4	21 次第 2 号住居跡 (第 14 図 5)
	1	21 次 G 区第 2 号溝跡 (2) (南西から)	5	21 次第 2 号住居跡 (第 14 図 7)
	2	21 次 K 区第 5 号溝跡 (東から)	6	21 次第 2 号住居跡 (第 14 図 10)
	3	21 次 F 区第 5 号溝跡 (西から)	7	21 次第 4 号住居跡 (第 17 図 8)
	4	21 次 B・C 区第 6 号溝跡 (西から)	8	21 次第 7 号住居跡 (第 23 図 3)
図版 14	5	21 次 I 区第 6 号溝跡 (北東から)	9	21 次第 6 号住居跡 (第 21 図 1)
	6	21 次 J 区第 8 号溝跡 (西から)	図版 14	1 21 次第 6 号住居跡 (第 21 図 2)
			2	21 次第 8 号住居跡 (第 25 図 1)

- 3 21 次第第8号住居跡 (第25図5)
 4 21 次第第8号住居跡 (第25図9)
 5 21 次第第8号住居跡 (第25図8)
 6 21 次第第8号住居跡 (第25図10)
 7 21 次第第8号住居跡 (第25図11)
 8 21 次第第9号住居跡 (第27図1)
 9 21 次第第9号住居跡 (第27図2)
 10 21 次第第9号住居跡 (第27図3)
 11 21 次第第9号住居跡 (第27図4)
 図版15 1 21 次第第9号住居跡 (第27図6)
 2 21 次第第9号住居跡 (第27図14)
 3 21 次第第9号住居跡 (第27図15)
 4 21 次第第11号住居跡 (第31図2)
 5 21 次第第12号住居跡 (第33図1)
 6 21 次第第13号土壌 (第42図2)
 7 21 次第第5号溝跡 (第46図1)
 8 21 次ビット (第49図2)
 9 21 次グリッド (第50図1)
 図版16 1 21 次グリッド (第50図8)
 2 23 次第1号住居跡 (第53図1)
 3 23 次第1号住居跡 (第53図6)
 4 23 次第1号住居跡 (第53図3)
 5 23 次第1号住居跡 (第53図7)
 6 23 次第1号住居跡 (第53図9)
 7 23 次第1号住居跡 (第53図10)

- 図版17 1 23 次第1号住居跡 (第53図15)
 2 23 次第1号住居跡 (第53図8)
 3 23 次第1号住居跡 (第53図14)
 4 21 次第4号住居跡 (第17図9)
 袖石
 5 21 次第4号住居跡 (第17図10)
 袖石
 6 21 次鍛冶関連遺物 (第37図)
 7 21 次第1号住居跡 (1) (第11図)
 8 21 次第1号住居跡 (2)
 (第11・12図)
 9 21 次第1号住居跡 (3) (第12図)
 図版18 1 21 次第2・3・4号住居跡
 (第14・15・17図)
 2 21 次第5・6・8・9・12・13号
 住居跡 (第19・21・25・27・33・35図)
 3 21 次第8号溝跡 (第46図)、
 第1号道路跡 (第47図)、
 ビット (第49図)、
 グリッド (第50図)
 4 23 次第1号住居跡 (第53図)
 5 27 次第1号溝跡 (第58図)、
 グリッド (第59図)
 6 21 次石製品 (1) (第36・42図)
 7 21 次石製品 (2) (第36図)
 8 21 次瓦 (第33・42図)

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

埼玉県では、平成 24 年度から平成 28 年度の新 5 か年計画「埼玉県 5 か年計画—安心・成長・自立自尊の埼玉へ—」において「埼玉の成長を支える社会基盤を作る」という基本目標を掲げ、その一環として地域の生活を支える身近な道路の整備を進めている。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課では、このような施策の推進に伴う文化財の保護について、従前より関係部局との事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

県道上尾蓮田線改修事業にかかる埋蔵文化財の所在及び取扱いについては、平成 15 年 1 月 5 日付け杉土第 1330 号で、道路建設課長（当時）より文化財保護課長（当時）あて照会があった。

文化財保護課では確認調査を実施し、その結果をもとに、平成 15 年 1 月 27 日付け教文第 1443 号で、荒川附遺跡の取扱いについて次のように回答した。

1 埋蔵文化財の所在

名称	種別	時代	所在地
荒川附遺跡 (82-020)	集落跡	旧石器・縄文・奈良・平安	蓮田市関山 3・4 丁目

2 取扱い

埋蔵文化財が所在する範囲について、工事計画上やむを得ず現状を変更する場合には、記録保存のための発掘調査を実施してください。

発掘調査については、実施機関である財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団（当時）と道路建設課、文化財保護課の三者により調査方法、期間、経費等の問題を中心に協議が行われた。その結果、平成 15 年 12 月 19 日から平成 16 年 3 月 24 日、平成 21 年 2 月 9 日から 3 月 24 日、平成 25 年 10 月 1 日から 31 日までの期間で、実施することになった。

文化財保護法第 94 条の規定による埋蔵文化財発掘通知が埼玉県知事から提出され、同法第 92 条の規定による発掘調査届が財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出され発掘調査が実施された。

発掘調査に係る通知は以下の通りである。

平成 16 年 1 月 29 日付け 教文第 2－86 号
平成 21 年 2 月 24 日付け 教生文第 2－79 号
平成 25 年 11 月 1 日付け 教生文第 2－42 号

（埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課）

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

荒川附遺跡の調査は県道上尾田線の改築工事に先立ち、平成15年度(第21次)、20年度(第23次)、25年度(第27次)の3回実施した。調査面積は1,656㎡(第21次調査1,350㎡、第23次調査159㎡、第27次調査147㎡)である。

第21次調査

第21次調査は平成15年12月19日から平成16年3月24日まで実施した。

平成16年1月7日に事務所の設置を行い、15日に重機による表土除去作業を開始した。16日から補助員による遺構確認作業を行い、並行して遺構測量用の基準点測量及びグリッド杭打設作業を実施した。

確認作業の結果、古墳時代から近世に至る竪穴住居跡、溝跡、土壌など多数の遺構を検出した。直ちに精査を開始し、順次土層断面図、遺構平面図、写真撮影等の記録作成作業を行った。

その後重機により調査区を埋戻し、3月23日に遺物、器材を撤収して現地調査を終了した。

第23次調査

第23次調査は平成21年2月9日から平成21年3月24日まで実施した。

平成21年2月9日に事務所の設置を行い、10日に重機による表土除去作業を開始した。16日から補助員による遺構確認作業を行い、並行して遺構測量用の基準点測量及びグリッド杭打設作業を実施した。

確認作業の結果、奈良時代の竪穴住居跡、近世の溝跡、土壌、ビットを検出した。調査区の南側から直ちに精査を開始し、順次土層断面図、遺構平面図、写真撮影等の記録作成作業を行った。

その後重機により調査区を埋戻し、3月23日に遺物、器材を撤収して現地調査を終了した。

第27次調査

第27次調査は平成25年10月1日から平成25年10月31日まで実施した。

平成25年10月1日に発掘事務所の設置を行い、2日に重機による表土除去作業を開始した。8日から補助員による遺構確認作業を行い、並行して遺構測量用の基準点測量及びグリッド杭打設作業を実施した。

確認作業の結果、奈良時代の溝跡、近世の土壌、ビットを検出した。直ちに精査を開始し、順次土層断面図、遺構平面図、写真撮影等の記録作成作業を行った。

その後重機により調査区を埋戻し、10月31日に遺物、器材を撤収して現地調査を終了した。

(2) 整理報告書作成

整理報告書の作成作業は平成25年12月2日から平成26年3月31日まで実施した。

作業は出土遺物の水洗・注記から開始し、直ちに接合復元に着手した。復元を終えた遺物は順次実測、トレース、採拓を経て遺構ごとに印刷用の挿図を作成した。2月上旬には図版用の遺物写真を撮影した。

同時に、発掘調査で記録した遺構の断面図や平面図等を照合し、修正を加えてスキャナーでコンピューターに取り込んだ。その後、画像編集ソフトを用いて遺構ごとにトレースし、土層説明等を組み込んで、印刷用の版下とした。

2月中旬までに原稿執筆を終え、報告書の編集を行った。入稿後、3回の校正を経て、平成26年3月25日に報告書(本書)を刊行した。

なお、図面や写真などの記録類や遺物は、3月に整理分類のうえ、埼玉県文化財収蔵施設の収蔵庫へ仮収納した。

3. 発掘調査・報告書作成の組織

平成 15 年度（発掘調査）

理 事 長	桐 川 卓 雄	調査部	
常務理事兼総務部長	中 村 英 樹	調 査 部 長	宮 崎 朝 雄
総務部		調 査 部 副 部 長	坂 野 和 信
総 務 部 副 部 長	村 田 健 二	主 席 調 査 員	昼 間 孝 志
主 席	田 中 由 夫	統 括 調 査 員	富 田 和 夫
		調 査 員	田 代 雄 介

平成 20 年度（発掘調査）

理 事 長	刈 部 博	調査部	
常務理事兼総務部長	萩 元 信 隆	調 査 部 長	村 田 健 二
総務部		調 査 部 副 部 長	磯 崎 一
総 務 部 副 部 長	昼 間 孝 志	調査監兼調査第一課長	金 子 直 行
総 務 課 長	松 盛 孝	調 査 第 二 課 長	細 田 勝

平成 25 年度（発掘調査）

理 事 長	中 村 英 樹	調査部	
常務理事兼総務部長	大 嶋 紳一郎	調 査 部 長	昼 間 孝 志
総務部		調 査 部 副 部 長	鯛 持 和 夫
総 務 部 副 部 長	富 田 和 夫	調査監兼調査第二課長	赤 熊 浩 一
総 務 課 長	藤 倉 英 明	主 事	魚 水 環

平成 25 年度（報告書作成）

理 事 長	中 村 英 樹	調査部	
常務理事兼総務部長	大 嶋 紳一郎	調 査 部 長	昼 間 孝 志
総務部		調 査 部 副 部 長	鯛 持 和 夫
総 務 部 副 部 長	富 田 和 夫	主幹兼整理第一課長	黒 坂 禎 二
総 務 課 長	藤 倉 英 明	主 査	福 田 聖

Ⅱ 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

荒川附遺跡は、J R 宇都宮線蓮田駅から約 1 km 北の蓮田市関山三丁目から四丁目にかけて所在する。蓮田市は埼玉県の中東部に位置し、J R 宇都宮線、東北自動車道が通り、都心へ約 40 km という利便性から急速に市街化が進んでいる。その一方で、元荒川や見沼代用水、黒浜沼、山の神沼周辺には豊かな自然が残されている。遺跡の立地する関山周辺は大宮台地蓮田支台の東縁にあたり、宅地と畑地の混在する景観が広がっている。

大宮台地は埼玉平野の中央に位置し、荒川と中川の両低地に挟まれた南北約 25km、東西約 18km の立川面に相当する低台地である。その中心を貫流する星川～綾瀬川を境に西側は安行支台、東側は蓮田・岩槻・白岡・慈恩寺各支台に大

別される。

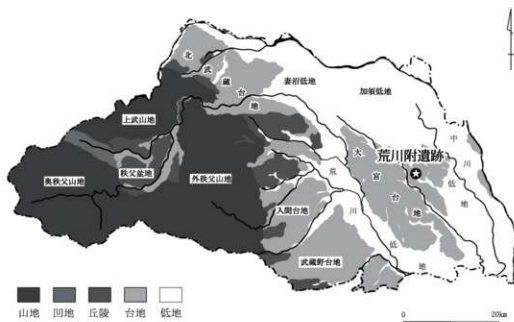
荒川附遺跡の立地する蓮田支台は、岩槻支台と連続するため、蓮田岩槻支台とも呼ばれる細長い台地で、東側は元荒川、西側は綾瀬川の低地に面している。蓮田市高虫付近から始まり、井沼、関戸を経て、蓮田駅付近まで広がっている。標高は 13 ～ 16 m 程度でおよそ平坦である。蓮田駅からさいたま市平林寺の間で台地は狭く低くなり、これより南は岩槻支台と呼ばれている。

荒川附遺跡はこの蓮田支台の南東端、元荒川を 100 m ほど東に臨む台地縁辺に立地している。遺跡は標高約 13 m の台地上だが、元荒川に向かって緩やかに傾斜している。遺跡の東端は段丘崖に重なるが、南東側は低地にまで及んでいる。元荒川との比高差は約 4 m である。

2. 歴史的環境

荒川附遺跡周辺では、国道 122 号線バイパスの建設や改築、個人住宅の建築工事に先立って発掘調査が実施されている。その成果として、当事

業団から「荒川附遺跡」（第 122 集）、「荒川附遺跡Ⅱ」（第 338 集）、蓮田市教育委員会から「『的場 八番 荒川附遺跡』（第 2 集）、「荒川附遺跡



第 1 図 埼玉県の地形

一第7・8地点— 宿下遺跡—第6地点—』(第14集)等が刊行されている。

蓮田支台周辺の歴史的環境については、上記の報告書において詳細に述べられている。そこで、本書では今回の調査で成果が得られた古墳時代後期から平安時代の歴史的環境について、蓮田支台を中心に概観したい(第2図)。

元荒川流域では、古墳時代後期の集落は、6世紀前半から平安時代まで連続と集落が営まれている荒川附遺跡が中核的な集落で、それ以外はごく小規模である。6世紀代の集落跡としては、ささら遺跡(16)で住居跡1軒、殿の下遺跡(21)で住居跡3軒が検出されている。7世紀前半では、白岡市神山遺跡(6)で住居跡2軒が検出されているのみである。綾瀬川流域では、大山遺跡(13)で住居跡19軒が検出されている。古墳時代前期から継続する中核的な集落だが、7世紀代には一旦途絶する。

後期古墳は十三塚古墳(15)、椿山古墳群(17)、ささら遺跡の三箇所検出されている。十三塚古墳は本遺跡北方にある直径24mの円墳で、凝灰質砂岩切石積みの横穴式石室を備える。地域を代表する7世紀前半の古墳である。本遺跡の南側のささら遺跡では3基の円墳が調査されている。このうち1・3号墳は7世紀の築造と考えられ、凝灰質砂岩切石積みの横穴式石室を備えている。元荒川対岸の椿山古墳群には、6世紀後半の古墳が1基含まれている。元荒川下流域では、さいたま市岩槻区に、銀象嵌の太刀が伝世されているつかのこし古墳(瀧瀬・野中1996)、凝灰岩質砂岩切石積みの横穴式石室を備えた竹たば古墳(岩槻市1983)が存在したことが知られている。元荒川上流域では菖蒲町神ノ木Ⅱ遺跡で中～後期の円墳跡2基、方墳跡2基、土壇墓7基が調査されている(山本・瀧瀬2008)。第107号土壇墓からは、鉄剣、鉄刀、鉄鎌、鉄鍬といった多量の副葬品が出土している。

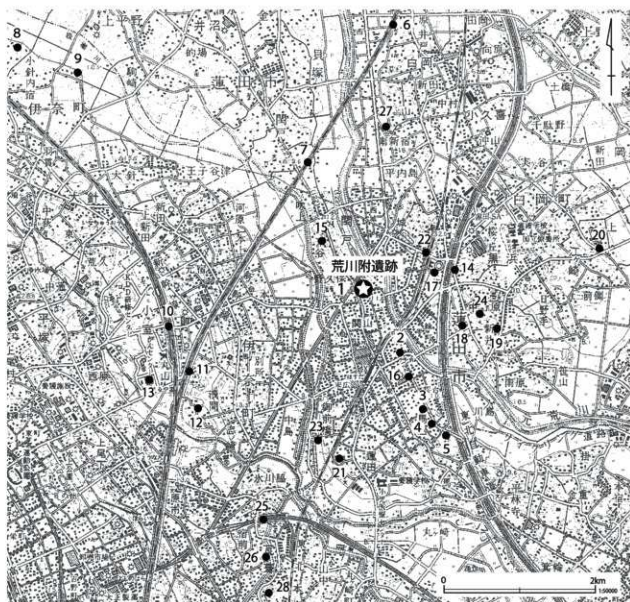
古墳時代後期における蓮田支台の周辺は、上記の切石積横穴式石室の古墳に対応する集落が見出されていないのが現状である。

奈良時代に入ると集落は増加する。元荒川流域では荒川附遺跡が最大の集落である。古墳時代終末の7世紀後半から奈良時代が主体で、平安時代にはやや縮小傾向にある。9世紀後半には元荒川対岸の椿山遺跡に主体が移り、9世紀後半から10世紀にかけての住居跡76軒、製鉄関連の生産跡23基等が調査されている(寺内ほか1989)。御林遺跡(14)は椿山遺跡に隣接する遺跡である。平安時代の住居跡5軒が調査され「武蔵」と刻書された紡錘車出土している。御殿場遺跡(22)も椿山遺跡に隣接する集落である。9世紀後半の住居跡1軒が調査されている。

元荒川流域では、左岸の白岡市タタラ山遺跡(27)で9世紀の住居跡2軒、中妻遺跡で8世紀後半の住居跡2軒から鉄滓や羽口が出土している(岡田2012)。志辺遺跡からは多量の鉄滓が、白岡町山遺跡第3地点、南鬼窪氏館跡からは古代の炭焼窯が検出されている。椿山遺跡同様タタラ山遺跡周辺は、製鉄関連の遺跡群と考えられる。右岸では、宮ノ前遺跡(23)で9世紀中葉の住居跡1軒、久台遺跡(2)で3軒、ささら遺跡で1軒の古代と考えられる住居跡が検出され、小規模な集落が点々と形成されている感が強い。下流のさいたま市岩槻区では府内三丁目遺跡(青木2002)で、9～10世紀の住居跡8軒が調査されている。

綾瀬川支流の原市沼川流域では、伊奈町大山遺跡、薬師堂根遺跡(8)、戸崎前遺跡(9)、向原遺跡(橋本2000)、丸山遺跡(10)、赤羽遺跡(11)、上尾市秋父山遺跡(25)、宿前Ⅰ遺跡(26)などで該期の集落跡が調査されている。

戸崎前遺跡と大山遺跡が中心的な集落跡だが、その初現は8世紀前半から中頃以降である。大山遺跡では、8世紀から10世紀にかけて操業したと推定される4群28基の製鉄炉(豎形炉)とそ



第2図 周辺の遺跡

第1表 周辺の主要遺跡

1 荒川附遺跡	7 関戸足利遺跡	13 大山遺跡	19 黒浜耕地遺跡	25 秩父山遺跡
2 久台遺跡	8 薬師堂根遺跡	14 御林遺跡	20 江ヶ崎貝塚	26 宿前Ⅰ遺跡
3 帆立遺跡	9 戸崎前遺跡	15 十三塚古墳	21 殿の下遺跡	27 タタラ山遺跡
4 馬込新屋敷遺跡	10 丸山遺跡	16 さくら遺跡	22 御殿場遺跡	28 東北原遺跡
5 馬込大原遺跡	11 赤羽遺跡	17 椿山遺跡・古墳群	23 宮の前遺跡	
6 神山遺跡	12 伊奈氏屋敷跡	18 宿下遺跡	24 黒浜堀ノ内遺跡	

れに伴う粘土採掘坑3基、炭焼窯15基、工房跡3軒、廃滓場6箇所、住居跡52軒が調査されており、鉄生産に特化した大規模な手工業生産遺跡で、足立郡の郡司が管掌した公的な工房跡と推定されている。

荒川附遺跡周辺では、元荒川をはじめとする大

宮台地を開析する中小河川から砂鉄が多く得られることから、鉄生産、鉄器生産を行う大規模な集落が多い。遺跡の立地もそれを前提とする台地の縁辺が選ばれている。律令体制下における手工業生産が重点的に行われている地域として、大きな役割を果たしていたのであろう。

III 遺跡の概要

荒川附遺跡は蓮田市関山三丁目から四丁目にかけて所在しており、遺跡の東側約100mには元荒川が南流している。市内は都市化が進み、遺跡周辺でも宅地が増え続けるものの、畑、果樹園なども残されている。

基本土層（第4図）は江戸時代以前の土層を8層に分層した。台地上のため土壌の堆積はほとんど見られず、ローム層までおよそ30～40cmの厚さであった。最上層（表土）は近年の道路建設や宅地化に伴う盛土が見られた。Ⅰ層は灰褐色土で天明三年（1783）の浅間山噴火に伴う浅間A軽石が多量に含まれている近世の堆積層である。Ⅱ層はローム粒子・炭化物を均等に多く含む黒褐色土で、中世の遺物が含まれている。削平されており、D・J区で認められるのみである。Ⅲ層はローム粒子・炭化物・焼土粒子を均等に少量含む暗褐色土で、古代の遺物が含まれている。Ⅳ層は黄褐色土でローム土にかかる漸移層である。

V層以下は、第23次調査区の旧石器時代試掘坑で確認した立川ローム層である。今回の調査では遺物の出土はない。武蔵野台地の標準層に対比が可能で、V層がソフトローム（立川Ⅲ層）、Ⅵ層がハードローム（立川Ⅳ層）である。双方ともソフト化が進んでおり、一部はⅦ層まで及んでいる。Ⅶ・Ⅷ層は黒色帯（立川Ⅶ・Ⅷ層）で、白色粒子を含む。Ⅷ層は、粘性が高い所謂水付ロームで、立川Ⅸ層に当たる。

遺構確認面の標高はおおよそ10.8～11.8mである。調査区は南側、及び東側へ向かって傾斜しており、A区とH区では1mほどの標高差がある。

本遺跡の調査は当事業団によって7回、蓮田市教育委員会によって20回の27次に及んでいる。市教育委員会の調査では、6世紀前半から9世紀後半までの住居跡45軒が報告されている。詳細は後述するため、ここでは時期ごとの内訳のみを

挙げておく。古墳時代は6世紀前半が2軒、7世紀後半が5軒、奈良時代は8世紀前半が14軒、8世紀後半が13軒、平安時代では9世紀前半が3軒、中葉が4軒、後半が1軒、不明が3軒である。

このうち8世紀後半の第6地点第15号住居跡、第22地点第90号住居跡は鍛冶工房で、鍛冶炉や被熱したビッドが検出されている。8世紀前半のB区住居跡、8世紀後半の第6地点第10～18号住居跡、9世紀前半の第6地点19号住居跡からは鉄滓が出土している。第7地点第1～3号土壌は焼土・炭化物を多量に含み、土器焼成壤の可能性がある。

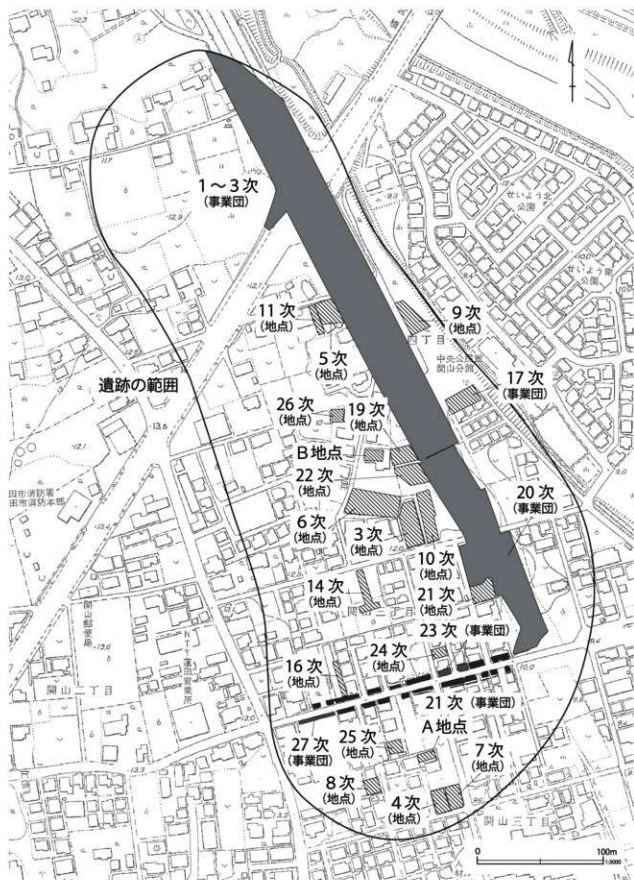
この他に第6地点では「東」、「石国」、「石」の複数の文字が墨書された8世紀前半の須恵器坏が出土している。

当事業団の調査は一般国道122号蓮田岩槻バイパス建設事業に伴って2回、5年次（1～3次、20次）にわたって行った。第1～3次調査（以下、事業団1～3次と表記）は昭和58年度、昭和62年度、平成元年度にかけて行い、その成果は事業団報告書第112集『荒川附遺跡』（木戸1992）として刊行した。

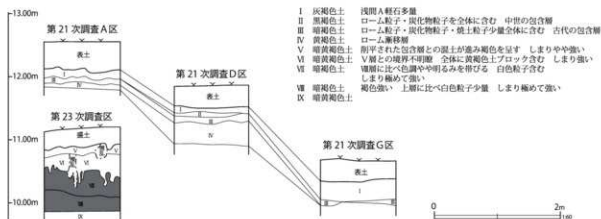
検出した遺構は住居跡98軒、竪穴状遺構2基、円形環状遺構1基、土壌65基、溝跡22条に上る。住居跡は縄文時代晩期1軒、古墳時代中期5軒、古墳時代後期52軒（6世紀前半11軒、6世紀末～7世紀前半14軒、7世紀後半27軒）、奈良時代（8世紀前半）11軒、平安時代（9世紀中葉）1軒、時期不明28軒である。

古墳時代後期の住居跡からは石製模造品と未製品が出土しており、玉作工房跡と考えられる。

本調査区は遺跡の北東側に当たるが、この箇所での集落の最盛期は7世紀後半から8世紀前半である。鍛冶関係の遺構と遺物は少なく、工房は8



第3図 調査地点位置図



第4図 基本土層

世紀前半の第81号住居跡のみである。平安時代は僅かに1軒に留まり、集落は終息を迎える。

第20次調査は平成13・14年度に実施し、その成果は事業団報告書第338集『荒川附遺跡Ⅱ』（富田2007）として刊行した。

検出された遺構は竪穴住居跡65軒、土壇62基、溝跡22条、井戸跡1基、道路跡1箇所、整地層1箇所である。

住居跡の時期は古墳時代中期7軒、古墳時代後期31軒（6世紀前半4軒、6世紀後半5軒、7世紀前半6軒、7世紀中葉～後半16軒）、奈良時代21軒（8世紀前半20軒、8世紀後半1軒）、平安時代（9世紀中葉）2軒、時期不明4軒である。事業団1～3次調査区同様に、集落の最盛期は7世紀後半から8世紀前半で、8世紀後半以降は急激に縮小している。

7世紀末から8世紀初頭の第63号住居跡は鍛冶工房で、多量の鍛造剥片、腕形卒、轆轤口、鉄鋸等の未製品がまとまって出土している。

検出した土壇62基のうち13基は、土器焼成場で、調査区の南側に入る低地に面した斜面に造られている。富田和夫が提唱する「水深長台形タイプ」で、7世紀後半から8世紀の年代である。

本書で報告する第21次調査では竪穴住居跡13軒、土壇14基、溝跡9条、道路跡1箇所、ピット100基を検出した。住居跡の時期は、古墳時

代後期4軒（7世紀中葉～後半）、奈良時代8軒（8世紀前半4軒、8世紀後半4軒）、平安時代（9世紀中葉）1軒である。

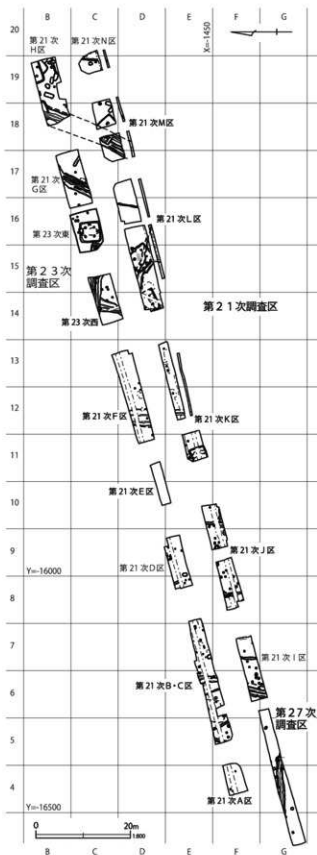
このうち8世紀後半の第9号住居跡は焼失家で、完形に近い須恵器環や土師器甕が出土した。

9世紀中葉の第10号住居跡からは鍛冶炉の一部と鍛造剥片が入ったピットの検出があり、鍛冶工房と考えられる。その他の遺構からも鍛冶関連遺物が多く出土していることから、集落内で大規模な鍛冶、鉄器生産が行われた様子が窺える。

第1・2・13号土壇は土器焼成場と考えられる。第1・2号土壇は出土遺物がほとんどなく時期が不詳だが、第2号土壇で出土した土師器暗文環の小破片から見て、第20次調査同様の7世紀後半から8世紀に帰属する可能性が高い。第13号土壇は灰釉陶器長頸瓶、須恵器環、甕、土師器甕、丸瓦、平瓦など、9世紀後半に帰属すると考えられる遺物が多く出土している。第20次調査同様の「水深長台形タイプ」である。本集落では7世紀から9世紀の長期にわたり、このように土師器の生産を継続していたと推定される。

その他の土壇は出土遺物がほとんどないものの、覆土の状態と重複関係から推して、いずれも近世に属すると思われる。

溝跡は第9号が中世、それ以外は近世のものである。第4号溝跡西半は硬化面が形成されており、



第5図 荒川附遺跡全体図

道路として使用されたと考えられることから、第1号道路跡とした。

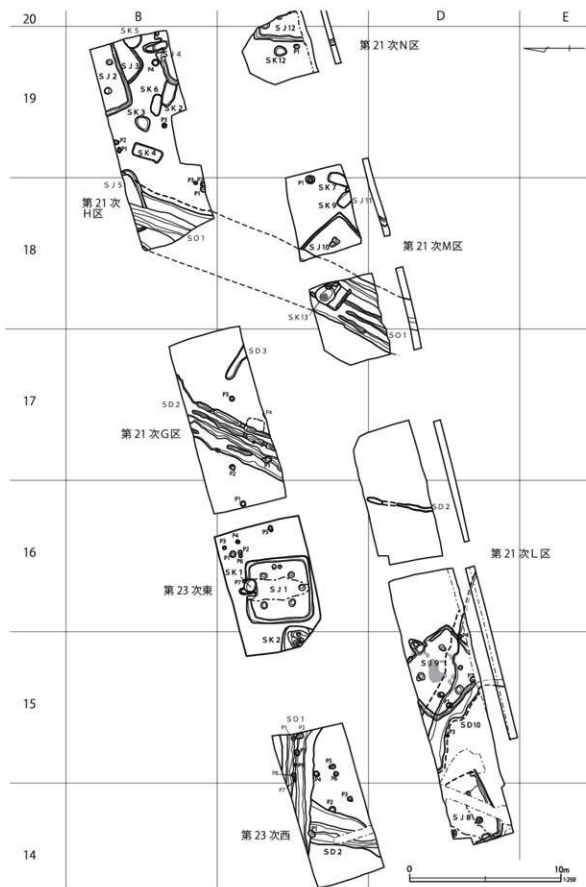
第23次調査では8世紀初頭の竪穴住居跡1軒、近世の溝跡2条、土壇2基、ピット19基を検出した。第1号住居跡は8世紀初頭に帰属し、土師器の甕がカマドの芯として利用されている。

第27次調査では、8世紀後半の溝跡1条、古代の土壇1基、ピット15基を検出した。調査区は南西方向に傾斜しており、現状では認識できないが南側に小さな谷が入っている可能性が高く、溝跡は遺構分布の南西端を示すと思われる。

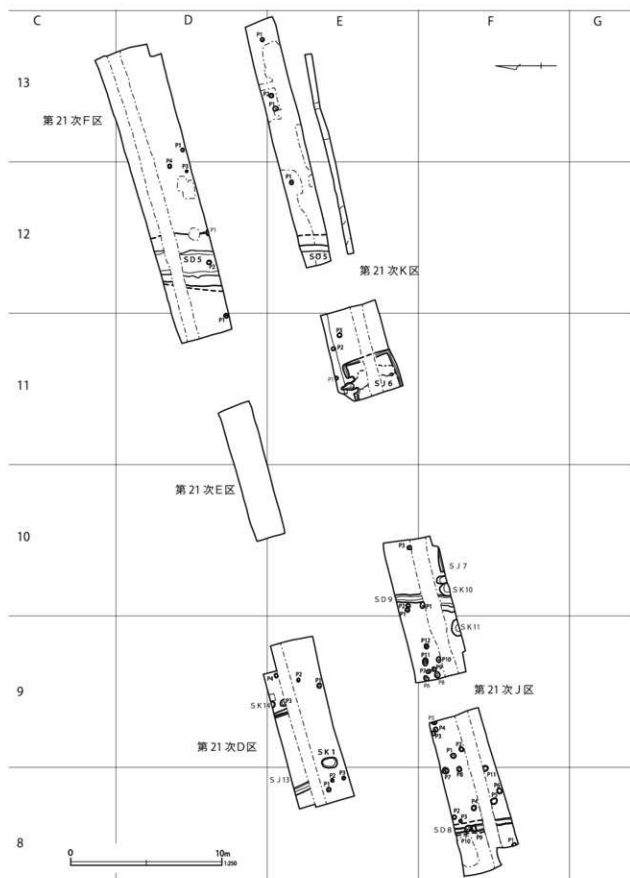
第21・23・27次調査では、北武蔵型環をはじめとする土師器環、皿、甕、台付甕、南北企座、末野座、湖西産、東海産の須恵器環、盤、長頸瓶、甕、土鍾、刀子、棒状鉄製品のほかに鍛冶関連遺物として羽口、碗形滓、鉄滓が出土している。

以上のように荒川附遺跡は、5世紀中葉から9世紀後半にかけて連続と続く集落跡であることが明らかとなっている。5・6世紀は遺跡の東側が集落の中心である。古墳時代末から奈良時代前半（7世紀後半から8世紀前半）に隆盛を迎え、遺跡全体に住居の分布が広がる。8世紀後半には国道122号バイパス関係の事業団調査区では検出例が少なくなり、遺跡の南西側の市調査区で13軒、事業団第21・23次調査区で4軒である。占地はやや南西側に移り、規模も小さくとなると考えられる。平安時代にはその傾向が一層強まり、遺跡全体に分布が見られるものの各調査区で1、2軒と散発的になり、集落は9世紀中葉にほぼ終焉を迎える。

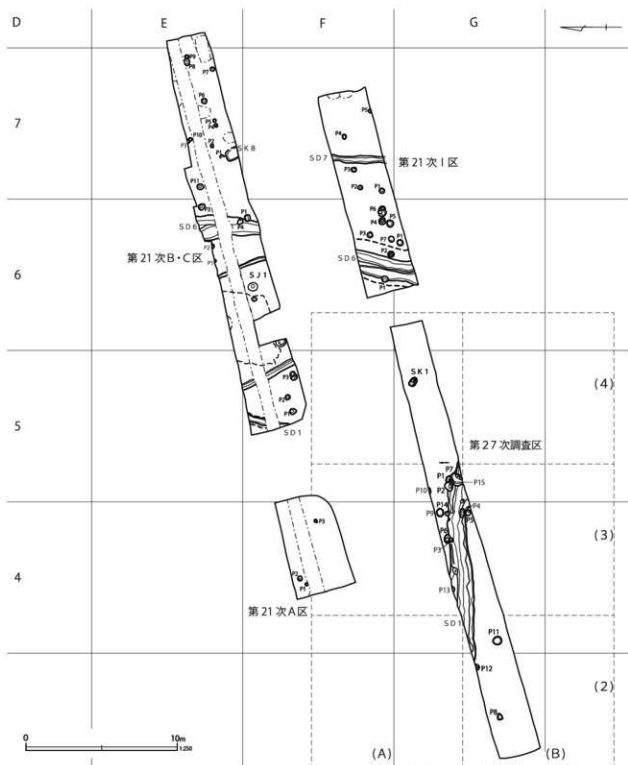
生産関連遺構のうち、鍛冶関連遺構は遺跡の南東側の市教委調査区B区、第6・22地点、事業団第20次調査区、第21次調査区東側に分布する。鍛冶関連の遺構群は、遺跡中央から東寄りの箇所に一定の広がりを持って分布している。土器焼成場は市教委調査区第7地点、事業団第20・21次調査区の遺跡南側の谷に面して分布している。鍛



第6図 分割図(1)



第7图 分割图(2)

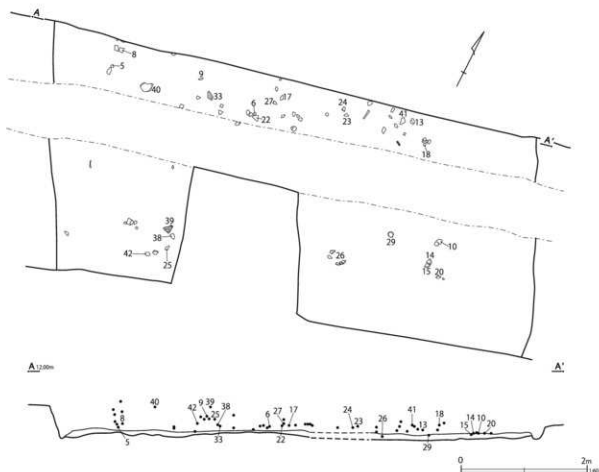


第8図 分割図(3)

冶工房、土器焼成坑は7世紀から9世紀まで長期にわたって継続しており、本集落が手工業生産を基盤としていたことを物語っている。

中世の遺構、遺物は検出されておらず、近世も

土壌、溝跡が僅かに認められるのみである。明治20年版の迅速測図では、遺跡周辺は畑や雑木林になっており、中世からの景観に大きな変化がない中で発掘調査に至ったと考えられる。



第10図 第1号住居跡遺物分布

する。遺構の南北が調査区域外にかかり、中央を攪乱により壊されており、住居跡の中央付近をスリット状に検出したのみである。

西壁の軸方向は $N-29^{\circ}-W$ である。規模は東西方向7.52 m、深さは0.60～0.70 mである。

覆土は3～5層がロームブロック、焼土、炭化物を多く含む赤褐色土、暗褐色土で埋め戻しの可能性がある。それ以外はロームを含む明褐色土で、自然堆積である。

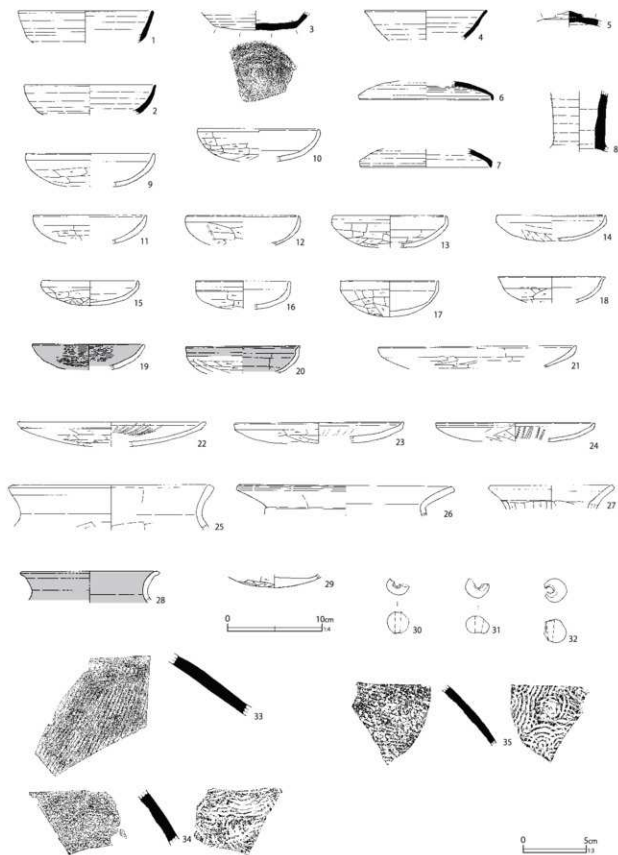
床面には5～10cmほどの厚さで、暗黄褐色土による貼床が施されていた。

施設は柱穴、壁周溝を検出した。柱穴は3本検出した。P2・3は径が0.65 m、0.70 m、深さ0.95 m、0.90 mと規模が大きく、柱痕を検出したことから主柱穴と考えられる。壁周溝は東西両側で検出し、幅0.20～0.45 m、深さ0.10 mほ

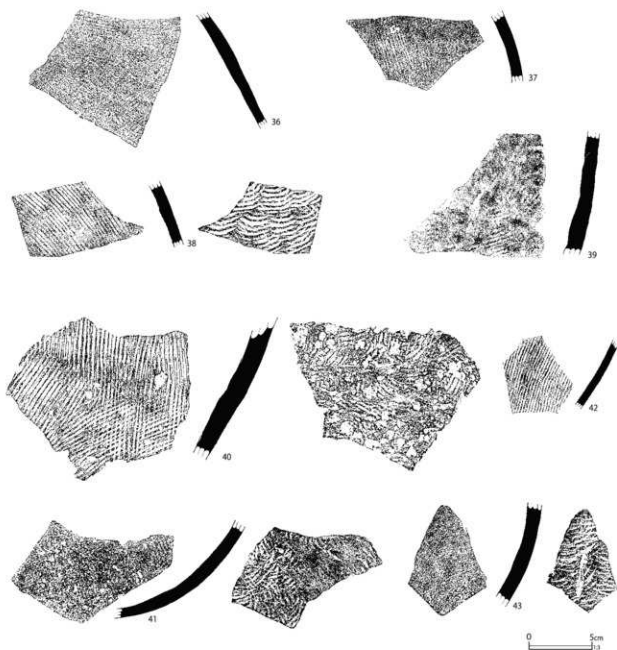
どである。10層は壁周溝の充填土である。

遺物は多く、7世紀末～8世紀初頭の土師器環、皿、甕、甕、須恵器環、蓋、長頸瓶、甕、土玉、鉄滓が床面近くから出土した。縄文前期土器、近世陶磁器が混入している。土器以外にも軽石や硬砂、骨片が覆土中から出土した。

第11図1～8は須恵器である。1・2は湖西産、3・4は南北企産の環である。4の環は混入の可能性ある。3の底面は周辺ヘラケズリである。5～7は蓋である。5は湖西産で大型の宝珠摘みが付く。6は東海産、7は湖西産の環蓋である。6は灰が多く掛かる。8は東海産の長頸瓶である。外面に自然軸がかかり、頸部に溜まる。9～29は土師器である。9～17は北武蔵型環である。口縁部がやや内屈するものと真直ぐ立ち上がるものがあり、深身、浅身、径の大小も認めら



第11图 第1号住居跡出土遺物(1)



第12図 第1号住居跡出土遺物(2)

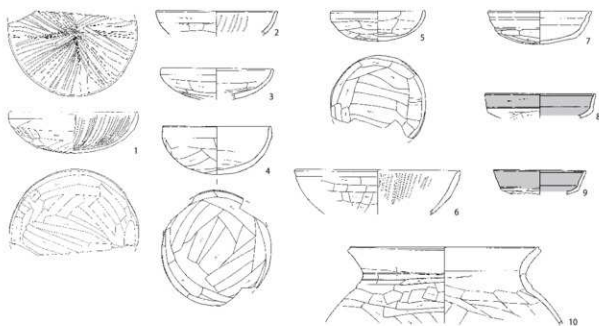
れ、多様である。10は放射状暗文の入る可能性がある。11は粘土が細かく、粉っぽい印象を受ける。12・15は雲母を多く含む。18は坏蓋模倣坏である。焼成が非常に良く硬質である。19は内外面ヘラ磨きが施され、赤彩されている。20は所謂続比企型坏である。口縁部外面、内面全体が赤彩される。21～24は北武蔵型皿である。21を除いて放射状暗文が施されている。25～27・29は土師器の甕である。25は口縁部があま

り開かず、胴部に横位のヘラケズリが施されている。27は小型で厚手である。29は丸底である。壺の底部の可能性も考えられる。28は壺である。全体に光沢があり、焼成が非常に良く、硬質である。30～32は土玉で、いずれも欠損している。径1.8cmほどで、ほぼ大きさが揃っている。

33～43は須恵器大甕である。33・42は湖西産、38・39・41は東海産、34・36・37は南北企産、35・40は末野産、43は産地不明である。いずれ

第2表 第1号住居跡出土遺物観察表 (第11・12図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	(14.3)	3.4	—	IK	5	良好	灰黄	瀬西産	17-7
2	須恵器	坏	(14.0)	3.1	—	IK	10	良好	灰	瀬西産	
3	須恵器	坏	—	2.0	(8.4)	EHIJK	30	普通	灰	南北企産	17-7
4	須恵器	坏	(13.0)	3.2	—	C IJK	10	良好	にぶい橙	南北企産	17-7
5	須恵器	蓋	—	1.6	—	AIK	60	良好	黄灰	瀬西産 No55	17-7
6	須恵器	蓋	(14.4)	2.0	—	IK	20	良好	灰黄	東海産 No29	17-7
7	須恵器	蓋	(13.9)	1.9	—	IK	5	良好	灰黄	瀬西産	
8	須恵器	長頸瓶	—	6.6	—	IK	40	良好	灰白	東海産 自然釉 No59	17-7
9	土師器	坏	(13.6)	3.5	—	ABC I K	20	普通	橙	No61	13-1
10	土師器	坏	(13.0)	3.4	—	AC I K	25	普通	にぶい橙	No32	
11	土師器	坏	(12.0)	3.0	—	AH I K	20	普通	橙		
12	土師器	坏	(12.0)	3.1	—	ACH I K	15	普通	橙		
13	土師器	坏	(12.0)	3.4	—	AC I K	20	普通	にぶい黄橙	No4	
14	土師器	坏	(11.6)	2.7	—	ACH I K	20	普通	にぶい橙	No33	
15	土師器	坏	(10.3)	2.6	—	AC I K	25	普通	にぶい橙	No34	
16	土師器	坏	(10.0)	2.9	—	AC I K	15	普通	橙		17-7
17	土師器	坏	(10.4)	3.7	—	ACH I K	30	普通	橙	No22	
18	土師器	坏	(11.4)	2.7	—	ACH I K	15	良好	にぶい赤褐	No2	
19	土師器	坏	(12.0)	2.6	—	ACH I K	5	普通	橙	内外面赤彩	
20	土師器	坏	(12.2)	2.9	—	A E H I K	20	良好	にぶい赤褐	内面・外面口縁部赤彩 No35	17-7
21	土師器	皿	(20.8)	2.3	—	AC I K	10	普通	にぶい黄褐		
22	土師器	皿	(20.0)	2.6	—	AC I K	15	普通	暗赤褐	内面暗文 No26	17-7
23	土師器	皿	(18.0)	2.2	—	CH I K	10	普通	橙	暗文 No14	
24	土師器	皿	(17.0)	2.0	—	A C E H I K	10	普通	橙	暗文 No15	
25	土師器	甕	(21.0)	4.7	—	A C E H I K	20	普通	にぶい橙	No45	
26	土師器	甕	22.8	3.2	—	A C E H I K	50	普通	橙	No38	
27	土師器	甕	(13.0)	2.5	—	AIK	25	普通	にぶい赤褐	No25	
28	土師器	壺	(14.6)	3.3	—	A E H I K	15	良好	明赤褐	内外面赤彩	
29	土師器	甕	—	1.4	—	A C H I K	90	普通	にぶい黄橙	No37	
30	土製品	土玉	径1.8cm	高さ1.7cm	孔径0.4cm	残存50% 重さ2.7g					17-7
31	土製品	土玉	径1.8cm	高さ1.4cm	孔径0.7cm	残存60% 重さ2.8g					17-7
32	土製品	土玉	径1.8cm	高さ1.8cm	孔径0.7cm	残存85% 重さ4.2g					17-7
33	須恵器	甕	—	5.3	—	IJK	5	良好	黄灰	瀬西産 No30	17-8
34	須恵器	甕	—	3.9	—	IJK	5	良好	灰	南北企産 埴山	17-8
35	須恵器	甕	—	4.8	—	A E H I K	5	良好	にぶい黄橙	未野産	17-8
36	須恵器	甕	—	9.3	—	A H I J K	5	普通	灰	南北企産	17-8
37	須恵器	甕	—	5.8	—	E H I J	5	普通	灰	南北企産	17-8
38	須恵器	甕	—	5.1	—	A H I K	5	普通	にぶい黄橙	東海産 No44	17-8
39	須恵器	甕	—	9.9	—	IK	5	良好	灰	東海産 No43	17-9
40	須恵器	甕	—	12.5	—	A B E H I K M	5	普通	灰	未野産 No53	17-9
41	須恵器	甕	—	12.4	—	A H I	5	普通	にぶい黄橙	東海産 No7	17-9
42	須恵器	甕	—	5.5	—	A E I J K	5	良好	黄灰	瀬西産 No47	17-9
43	須恵器	甕	—	7.3	—	A C H I K	5	普通	橙	産地不明 酸化塩焼成	17-9



第14図 第2号住居跡出土遺物

第3表 第2号住居跡出土遺物観察表 (第14図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	13.5	4.5	—	ACH IJK	55	良好	明赤褐	内面暗文 №10	13-2
2	土師器	坏	(13.0)	2.5	—	A E H I K	15	普通	橙	内面暗文	18-1
3	土師器	坏	(12.0)	3.3	—	A C H I K	20	普通	橙		
4	土師器	坏	11.6	5.1	—	C I K	85	普通	にぶい黄橙	内外面黒色処理 №13・14・15	13-3
5	土師器	坏	10.0	3.2	—	A C E H I K	80	普通	にぶい橙	№1・5	13-4
6	土師器	坏	17.6	4.7	—	A C E H I K	15	良好	橙	内面暗文 №2	18-1
7	土師器	坏	11.0	3.5	—	A C H I K	90	普通	灰黄褐	内外面黒色処理 №13	13-5
8	土師器	坏	(11.8)	2.6	—	A B E I K	10	普通	橙	口縁部外面・内面全体赤彩	
9	土師器	坏	(9.8)	2.5	—	A H I K	20	普通	明赤褐	口縁部外面・内面全体赤彩	
10	土師器	壺	(20.0)	8.0	—	A C H I K	20	良好	橙	№12	13-6

床面は住居中央と壁際を周溝状に深さ 20cm ほどに掘り下げ、5～10cm ほどの厚さで、明褐色土による貼床が施されていた。中央付近の床面は硬化していた。

施設は柱穴、壁周溝を検出した。柱穴は1本を検出した (P1)。径 0.50 m、深さ 0.80 m と規模が大きく、柱根の破片と思われる炭化物を含む粘性の高い暗褐色土 (1層) が認められることから主柱穴と考えられる。壁周溝は連続しており、幅 0.15～0.35 m、深さ 0.15～0.25 m である。11層は壁周溝の充填土である。

遺物は少量で、埋め戻しの覆土と壁周溝の充填土から破片の状態で出土しており、住居跡廃絶後

にもたらされた可能性が高い。器種は、古墳時代後期の土師器坏、混入の平安時代の台付甕で、須恵器は含まれていない。

第14図1～6は北武蔵型坏である。深身、浅身、径の大小が認められる。特に6は大型である。口縁部は6が端部を摘まれやや外傾するが、それ以外はほぼ真直ぐ立ち上がる形態である。1・2・6は放射状暗文が入る。4・7は内外面黒色処理されている。7は有段口縁部である。8・9は所謂純比企型坏である。口縁部外面、内面全体が赤彩されている。10は壺である。頸部に大きな接合痕が認められる。荒川附V～VI期にかけての時期に相当し、7世紀末と考えられる。

第4表 第3号住居跡出土遺物観察表 (第15図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	焼成	備考	図版
1	土製品	土玉	3.2	3.2	0.3	100	28.2	No2	18-1
2	土製品	土玉	3.35	3.0	0.4	100	26.4	No1	18-1
3	土製品	土玉	3.3	2.8	0.5	90	25.7	No3	18-1
4	土製品	土玉	3.6	2.9	0.7	70	27.3		18-1

第3号住居跡 (第13・15図)

H区東側のB-19グリッドに位置する。遺構の東側の大部分が調査区域外にかかり、北側は第2号住居跡に大きく壊されている。

検出した南辺、西辺は直線的で、南辺の軸方向はN-49°-Eである。規模は検出できた範囲で東西方向2.60m、南北方向1.20mである。深さは0.15mである。覆土はローム粒子、炭化物、焼土を含む暗褐色土で、自然堆積である。

床面は3cmほどの厚さで、暗黄褐色土による貼床が施されていた(19層)。

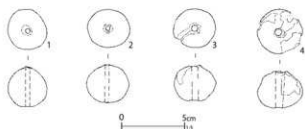
施設は柱穴、壁周溝を検出した。柱穴は第2号住居跡床面で検出した。第2号住居跡P1底面の高さが30cmほど高く、位置的にも相応しいことから、本住居跡の柱穴とした(P1)。径0.40m、深さ0.26mだが、本住居跡の床面からは0.75mとなり、深さの点からも主柱穴と考えられる。壁周溝は連続しており、幅0.15m、深さ0.05～0.10mである。20層は壁周溝の充填土である。

遺物は少量で、特に集中することなく住居跡全体から出土した。土師器の甕胴部の破片のみで、実測可能だったのは土玉4点のみである。第15図1と2、3と4で形態が相似している。3・4は表面が剥がれ、いくつかの破片に大きく割れている。第2号住居跡に壊されていることから荒川附V期以前と考えられる。

第4号住居跡 (第16・17図)

H区東側のB-19グリッドに位置する。遺構の東側と南側の大部分が調査区域外にかかり、第2号土壌を壊して掘り込まれている。

平面形態は、調査できた範囲からはやや隅丸の方形と考えられる。北カマドで、カマドを通る住



第15図 第3号住居跡出土遺物

居跡の中軸線の方向は(主軸)N-12°-Wである。規模は検出できた範囲で東西方向3.60m、南北方向1.00m、深さ0.60～0.70mである。覆土は暗褐色土の自然堆積で、4層がローム粒子、炭化物、焼土を多く含む暗褐色土、明褐色土で埋め戻しの可能性がある。

床面は貼床が施されていた。深さ10～25cmほどの掘り方をロームブロックを含む暗褐色土(8層)によって埋め戻し、明褐色土の硬化面(7層)が認められた。

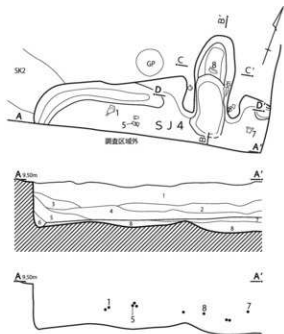
カマドは燃焼部が壁の外側に突出し、煙道は検出されていない。規模は全長1.60m、幅0.65mである。焚口部、燃焼部は段を持って深く掘り込まれ、ロームブロックを含む暗褐色土(14層)を入れて火床面が形成されている。燃焼部は不整な長楕円形である。火床面はあまり焼けず、左右両壁面が焼土化し、良く焼けていた。覆土は11・12層が天井の崩落土、13層が灰層である。袖は、凝灰質砂岩を芯に黄褐色粘土を含む暗褐色土の貼り付けにより造られ、内側が良く焼けていた。2・3の須恵器杯、8の土師器壺が出土している。

カマドの構築は北壁に三角形の突出した掘り方を掘り込み、燃焼部を掘り窪めて、芯材を置き、その形に合わせてロームブロックや黄褐色粘土ブロックを含む暗褐色土を貼付したと考えられる。

壁周溝は連続しており、幅 0.20～0.40 m、深さ 0.06 m である。

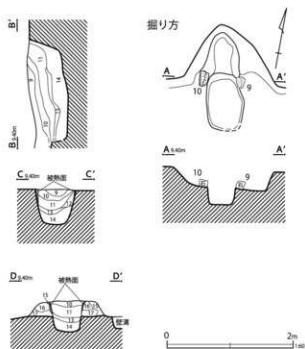
遺物は少なく、下層を中心に出土した。器種は、奈良時代初頭の須恵器環、蓋、土師器環、甕、壺である。第 17 図 1～4 は須恵器である。1～3 は末野産の環である。1 は径が大きく、見込みにノタ目が施されている。2 は断面が小豆色を呈し、

底面は手持ちヘラケズリである。4 は湖西産の蓋である。外面に自然釉がかかる。5～8 は土師器である。5 は北武蔵型の暗文環である。剥離が進むが黒色処理の可能性がある。6 は内外面ヘラ磨きが施されている。8 は胎土に角閃石を多く含む。9・10 は袖石である。凝灰質砂岩の切石の破片である。9 には 2 面、10 には 1 面の切断面が残る。



S J 4

- 1 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子微量
- 2 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子少量
- 3 暗褐色土 ロームブロック少量
- 4 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子多量 埋め戻し
- 5 暗褐色土 ローム粒子含む
- 6 暗褐色土 ロームブロック・粒子少量 しまりあり 壁溝
- 7 明褐色土 ロームブロック・暗褐色粘土含む とても密
- 8 暗褐色土 ローム粒子・ブロックを暗褐色土中に含む 胎床充填土
- 9 暗褐色土 ローム粒子・炭化物粒子・焼土粒子少量 カマド崩落後の自然堆積

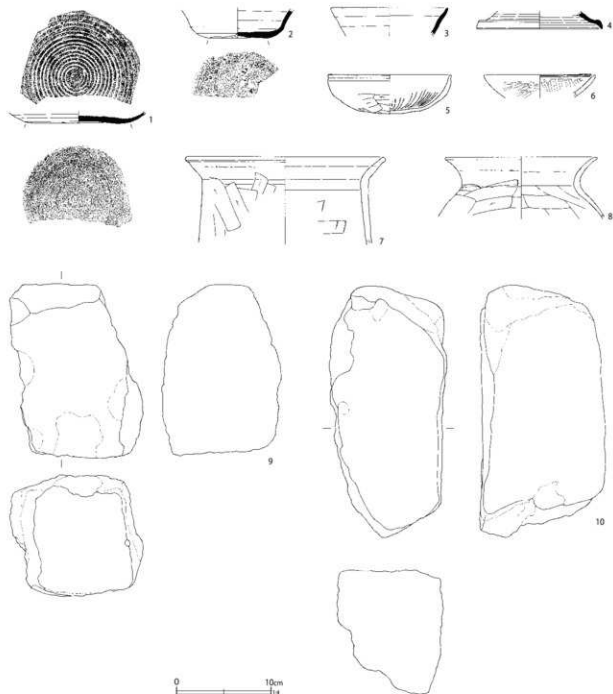


- 10 暗褐色土 焼土粒子 9 層よりやや多い ローム粒子・炭化物粒子含む カマド崩落後の自然堆積
- 11 明褐色土 焼土ブロック・ロームブロック・暗褐色土含む 天井崩落土
- 12 明褐色土 11 層より焼土量少ない 天井崩落土
- 13 暗褐色土 炭化物粒子多量 炭層
- 14 暗褐色土 ロームブロックと暗褐色土の凝土層 ロームブロック多量 カマド掘り方
- 15 暗褐色土 暗褐色土主体 黄褐色粘土ブロック少量
- 16 明褐色土 黄褐色粘土ブロック主体 焼土粒子・暗褐色土含む しまりあり
- 17 明褐色土 黄褐色粘土主体 しまりあり

第 16 図 第 4 号住居跡

第 5 表 第 4 号住居跡出土遺物観察表 (第 17 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版	
1	須恵器	環	—	1.3	11.2	A E H I K	70	普通	灰	末野産 No 1	18-1	
2	須恵器	環	—	3.1	(8.8)	B D E I K	30	良好	灰	末野産 3 と同一か？ カマド	18-1	
3	須恵器	環	(12.5)	3.0	—	A D E I K	10	良好	灰	末野産 2 と同一か？ カマド	18-1	
4	須恵器	蓋	(13.4)	1.8	—	A H I K	10	普通	灰白	湖西産か カマド	18-1	
5	土師器	環	(13.2)	4.1	—	A C H I K	25	普通	にぶい橙	内面暗文 No 4	18-1	
6	土師器	環	(12.0)	2.4	—	I K	5	普通	褐	カマド	18-1	
7	土師器	甕	(21.0)	9.3	—	A E H I K	10	普通	橙	No 6	18-1	
8	土師器	壺	(16.0)	6.5	—	A C H I K	20	普通	橙	カマド No 1	13-7	
9	石製品	袖石	縦18.4cm	横14.3cm	厚さ12.8cm	重さ2200g	凝灰質砂岩				カマド No 3	17-4
10	石製品	袖石	縦12.6cm	横26.6cm	厚さ13.2cm	重さ3600g	凝灰質砂岩				カマド No 1	17-5



第17図 第4号住居跡出土遺物

荒川附Ⅵ期、8世紀初頭と考えられる。

第5号住居跡（第18・19図）

H区西側のB-18・19グリッドに位置する。遺構の北側の大部分が調査区域外にかかり、第1号道路跡に大きく壊されている。

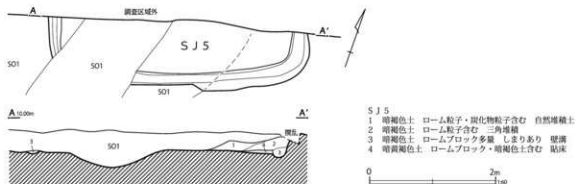
検出した南辺、東西辺は直線的で、南辺の軸方向はN-72°-Eである。規模は検出できた範

囲で東西方向4.10 m、南北方向1.00 mである。深さは0.10～0.15 mである。

覆土はローム粒子、炭化物を含む暗褐色土で、自然堆積である。壁際の2層は三角堆積である。

床面には暗黄褐色土の貼床が施されていた。

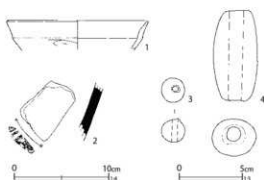
施設は壁周溝を検出した。幅0.15～0.30 m、深さ0.10 mで連続していた。南辺の中央付近は、



第18図 第5号住居跡

第6表 第5号住居跡出土遺物観察表 (第19図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(14.8)	3.2	—	A I K	5	普通	橙	床下	18-2
2	須恵器	甕	(6.3)	5.9	1.0	E I	5	良好	黄灰	転用砥具 南比企産	18-2
3	土製品	土玉	径1.9cm	高さ1.9cm	孔径0.4	残存100%					18-2
4	土製品	土錘	径3.5cm	長さ7.2cm	孔径1.1cm	残存100%				重さ69.7g	18-2



第19図 第5号住居跡出土遺物

第1号道路跡によって極端に覆土が薄くなっている。3層はロームブロックを多く含む周溝の充填土である。

遺物は少量で、床面から出土した。1の坏は坏蓋模倣坏で、床下からの出土である。2は南比企産の須恵器甕の転用砥具である。断面の部分が使用によって摩滅し、刃が当たったと思われる痕跡も認められる。4は大型の土錘で、ほぼ完形である。風化著しい。

第6号住居跡 (第20・21図)

K区西側のE-11グリッドに位置する。遺構の西側と南側の一部が調査区域外にかかる。

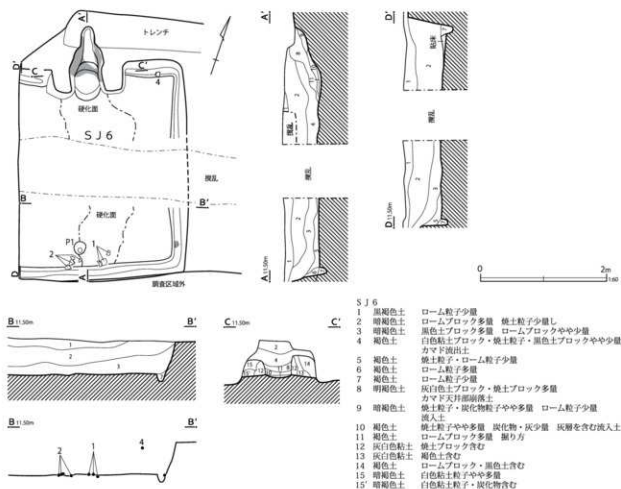
平面形態は方形で、北カマドである。カマドを通る住居跡の中軸線方向(主軸)はN-19°

-Wである。規模は主軸方向3.40 m、直交する軸方向は検出範囲で2.65 m、深さ0.50～0.60 mである。覆土は黒褐色土、暗褐色土、褐色土の自然堆積だが、2・3層はロームブロック、黒色土ブロックを多く含む暗褐色土で、埋め戻しである。

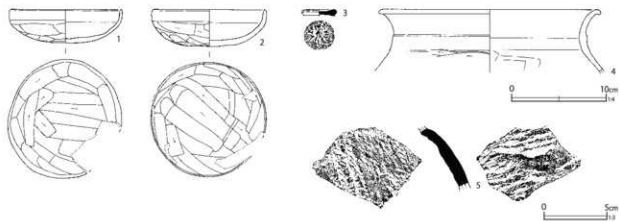
床面は平坦で、暗黄褐色土による貼床がごく一部に認められた。住居中央は良く踏み固められ、硬化面になっている。

カマドは燃焼部が壁の外側に突出し、段を持つ。規模は全長1.20 m、幅0.50 mである。焚口部、燃焼部は掘り方が一段深く掘り込まれ、ロームブロックを多く含む褐色土(11層)を充填して火床面が形成されている。燃焼部は不整な長楕円形である。火床面はあまり焼けず、左右両壁面と奥壁が焼土化し、良く焼けていた。覆土は4層がカマド流出土、8層が天井の崩落土、9層が流入土、10層が灰層である。袖(12・13層)は灰白色粘土の貼付により造られ、内側が良く焼けていた。

床面では小穴1基(P1)と壁周溝を検出した。P1は径0.20 m、深さ0.10 mで、入り口部の施設と考えられる。周辺の床面から土師器の坏2点(第21図1・2)が割れた状態で出土している。



第20図 第6号住居跡



第21図 第6号住居跡出土遺物

第7表 第6号住居跡出土遺物観察表 (第21図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	12.0	3.5	—	A C H I K	85	普通	橙	No. 6・7・8	13-9
2	土師器	坏	12.0	3.9	—	A H I K	90	普通	橙	No. 3・4・5	14-1
3	須恵器	蓋	3.8	0.7	—	A E I K	100	普通	灰白	南比企産	18-2
4	土師器	甕	(23.2)	6.8	—	A C H I K	5	普通	橙	No. 1	18-2
5	須恵器	甕	—	5.0	—	A E H I K	5	普通	灰白	産地不明	18-2

壁周溝は幅 0.15 ～ 0.30 m、深さ 0.05 ～ 0.15 m で、連続している。

遺物は少なく、下層を中心に出土した。器種は、奈良時代初頭の須恵器蓋、土師器環、甕、混入の縄文土器である。第 21 図 1・2 は口縁部が直立する土師器の北武蔵型環である。1 はやや粘土が粗く、ざらついた感を受ける。3 は須恵器蓋の摘みで、剥離面には紋目が残る。4 は土師器の甕で、肩部に横位のヘラケズリが施されている。5 は須恵器の中型の甕と考えられる。灰白色を呈し、生産窯は不明である。荒川附 VI 期、8 世紀初頭と考えられる。

第 7 号住居跡 (第 22・23 図)

J 区東側の F-10 グリッドに位置する。遺構の大部分が調査区域外にかかり、西側は第 10 号土壌に壊されるため、検出できたのはカマドと北壁の一部のみである。

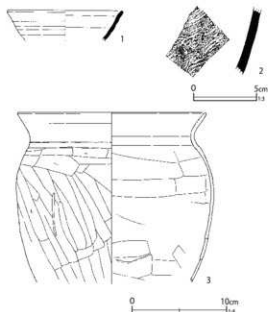
北カマドで、壁は直線的である。カマドを通る中軸線方向 (主軸) は N-7°-W である。規模は現状で東西方向 2.25 m、深さ 0.60 m である。覆土はローム粒子を含む暗褐色土の自然堆積だが、2・3 層はロームブロック、焼土を多く含む暗褐色土で、埋め戻しである。

カマドは、壁の外側に突出した燃焼部のみを検出した。煙道は検出していない。規模は全長

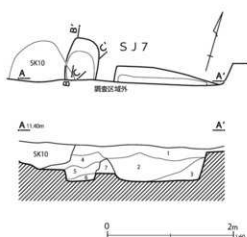
0.65 m、幅 0.50 m である。火床面は 6 層下の地山上だがあまり焼けず、左右両壁面と奥壁が焼土化し、良く焼けていた。覆土は 4 層がカマド流出土、5・8 層が天井の崩落土、6 層が灰を含む流入土である。6 層中から土師器甕 (第 23 図 3) が出土している。袖 (7 層) は灰白色粘土の貼付により造られ、内側が良く焼けていた。

検出できた部分は壁周溝の底面と考えられ、床面の状況は不明である。

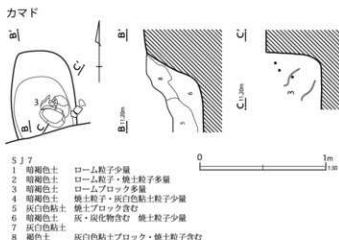
遺物はごく少なく、3 を除いて覆土中から出土した。器種は、奈良時代の須恵器環、甕、土師器



第 23 図 第 7 号住居跡出土遺物



第 22 図 第 7 号住居跡



- SJ7
- 1 暗褐色土 ローム粒子少量
 - 2 暗褐色土 ローム粒子・焼土多量
 - 3 暗褐色土 ロームブロック多量
 - 4 暗褐色土 焼土粒子・灰白色粘土粒子少量
 - 5 灰白色粘土 焼土ブロック含む
 - 6 暗褐色土 灰・炭化物含む 焼土粒子少量
 - 7 灰白色粘土
 - 8 褐色土 灰白色粘土ブロック・焼土粒子含む

第8表 第7号住居跡出土遺物観察表 (第23図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	(12.2)	3.2	—	A I J K	5	良好	灰	南北金産	
2	須恵器	甕	—	5.2	—	I J K	5	良好	灰	南北金産	
3	土師器	甕	20.0	17.9	—	A H I K	70	普通	橙	No.1	13-8

甕、鉄滓である。須恵器はいずれも南北金産である。2の甕は平行タタキをナデ消し、更に横位のナデが加えられている。荒川附VI期、8世紀後半と考えられる。

第8号住居跡 (第24・25図)

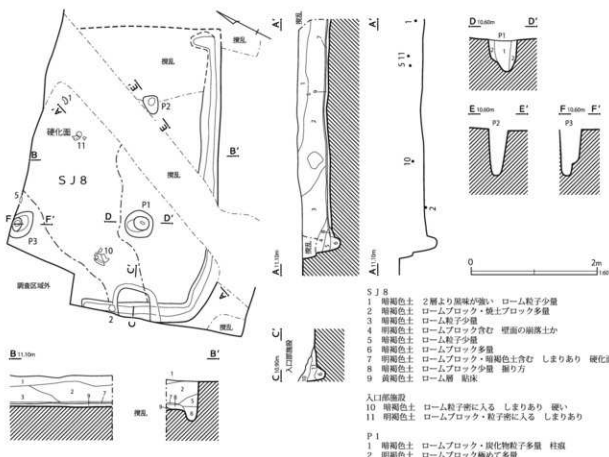
L区西側のD-14・15グリッドに位置する。遺構の東側を掘削により大きく壊され、北側と西側が調査区域外にかかる。入口部の施設があるため、逆に本来カマドがあったと考えられるが、掘削により失われている。

平面形態は方形で、東カマドと考えられる。南辺の軸方向はN-65°-Eである。規模は南北

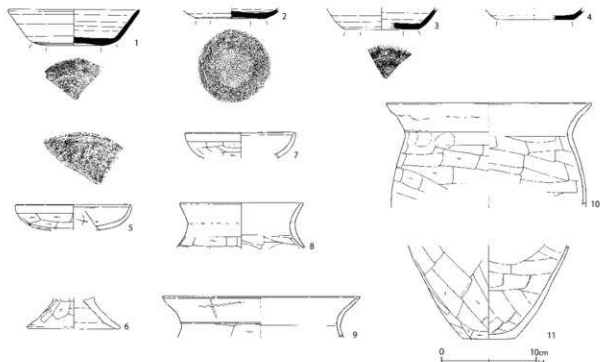
方向2.95 m、東西方向4.50 m、深さ0.40～0.45 mである。覆土は暗褐色土、明褐色土の自然堆積だが、2層はロームブロック、焼土ブロックを多く含む暗褐色土で、埋め戻しである。

床面は貼床が施されていた。深さ10～25 cmほどの掘り方が壁際に巡らされ、ロームブロックを含む暗褐色土(8層)によって埋め戻されていた。表面は明褐色土の硬化面(7層)になっており、入口部の施設の硬化面に連続している。

床面では入口部の施設、柱穴と壁周溝を検出した。入口部の施設は、0.70×0.50 m、高さ0.30 mのスロープである。壁周溝の上に、ローム土が



第24図 第8号住居跡



第25図 第8号住居跡出土遺物

第9表 第8号住居跡出土遺物観察表 (第25図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	(14.2)	3.8	(6.0)	A I K	25	良好	灰白	南比企産 No1 P3	14-2
2	須恵器	坏	—	1.2	7.4	A E H I J K	85	普通	灰	南比企産 No5	
3	須恵器	坏	—	2.3	(3.8)	A E I J K	20	普通	灰	南比企産	
4	須恵器	坏	—	1.3	(8.0)	A I J K	20	良好	灰黄	南比企産	
5	土師器	坏	(12.2)	2.7	—	A C I K	25	普通	にぶい褐	内外面黒色処理 刻書 No3	14-3
6	土師器	台付甕	—	3.3	(9.6)	A H I K	25	普通	にぶい黄褐		18-2
7	土師器	坏	(11.8)	2.7	—	A C I K	15	普通	にぶい褐		
8	土師器	甕	(13.2)	4.8	—	A C I K	30	普通	にぶい黄褐		14-5
9	土師器	甕	(21.0)	4.3	—	A H I K	20	普通	にぶい橙	刻書	14-4
10	土師器	甕	(22.0)	11.0	—	A C H I K	25	普通	にぶい赤褐	外面煤付着 No4	14-6
11	土師器	甕	—	10.0	(5.6)	A C I K	40	普通	にぶい橙	内外面煤付着 No2	14-7

密に入った暗褐色土、明褐色土で盛土が施されていた。10層上面は硬化していた。柱穴は3本検出した。P1からP3の順で、径0.45 m、0.30 m、0.50 m、深さ0.50 m、0.70 m、0.75 mと規模が大きく、P1・3には柱の当たりが認められることから、主柱穴と考えられる。P1には柱痕が認められた。壁周溝は幅0.25～0.30 m、深さ0.10～0.20 mで連続している。

遺物はやや多く、覆土中から出土した。特に2層中からが多い。器種は、奈良時代の須恵器坏、土師器坏、甕、台付甕、鉄滓である。この他に焼

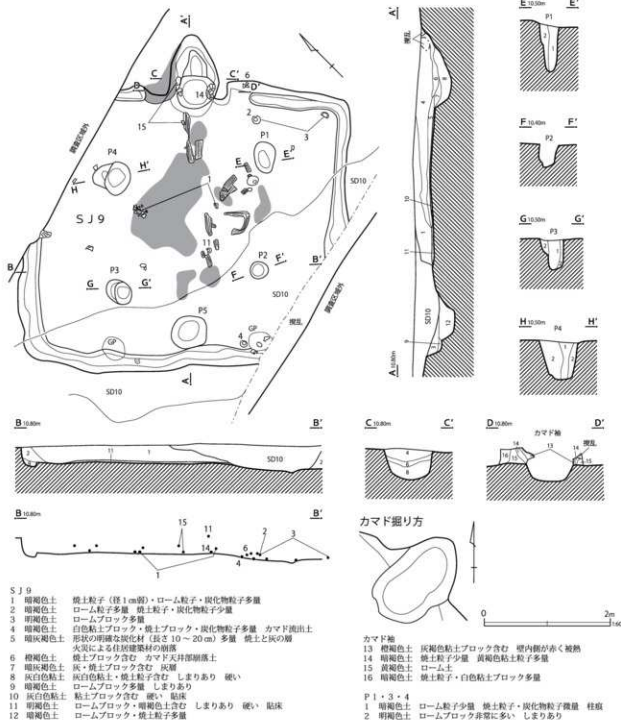
粘土塊が出土している。第25図1～4は南比企産の須恵器坏である。底面はいずれも周辺ヘラケズリである。5～11は土師器である。5・7は北武蔵型坏である。5は内外面黒色処理され、内面に細いヘラ状の工具で「」の刻書が認められる。6は台付甕の脚台部で、接合部がヘラケズリにより多角形になっている。8～11は甕である。9の外面にはヘラによる「」の刻書が認められる。11の底面はヘラケズリで、ドーナツ状に煤が付着する。荒川附Ⅶ期の古段階、8世紀中葉と考えられる。

第9号住居跡 (第26・27図)

L区西側のD-15・16グリッドに位置する。遺構の南北の一部が調査区域外にかかり、南西側は第10号溝跡に床面まで壊されている。

本住居跡は床面一面から焼土、炭化材が検出され、焼失家屋と考えられる。

平面形態は方形で、カマドは北東方向に取り付けられている。カマドを通る住居跡の中軸線の軸方向(主軸)はN-44°-Eである。規模は主軸方向4.50m、直交する軸方向で4.70m、深さ0.25mである。覆土はローム土、焼土、炭化物を多く含む暗褐色土、明褐色土で、埋め戻しであ



第26図 第9号住居跡

る。5層は炭化材と焼土、灰を多く含む屋根材等が焼けたものと考えられる。

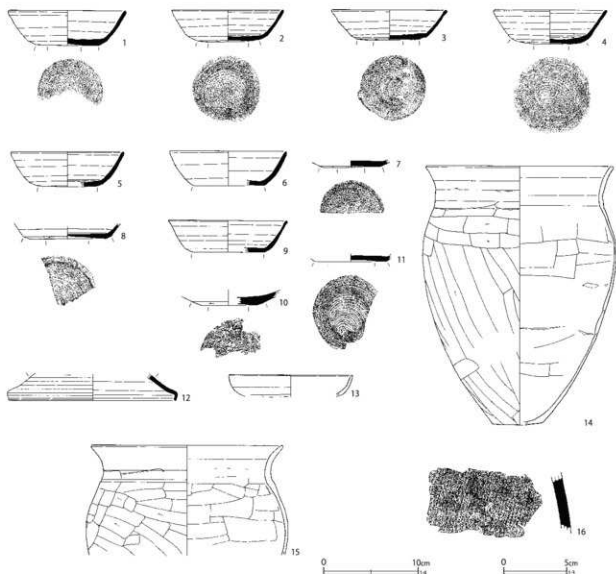
床面は貼床が施されていた。表面は灰白色粘土、明褐色土の硬化面(10・11層)になっている。

カマドは燃焼部が壁の外側に突出する。規模は全長1.30 m、幅0.90 mである。焚口部、燃焼部は掘り方が一段深く掘り込まれ、焼土を含む灰白色粘土(8層)を入れて火床面が形成されている。燃焼部は不整な楕円形である。火床面はあまり焼けず、左右両壁面が焼土化し、良く焼けていた。覆土は4層がカマド流出土、6層が天井の崩落土、7層が灰層である。袖(13～16層)は、ローム

を削り出して芯とし、白色粘土を貼って造られている。内側が良く焼けていた。

床面からは柱穴4本(P1～P4)と小穴1本(P5)、壁周溝を検出した。柱穴は4本検出した。P1からP4の順で、径0.50 m、0.30 m、0.45 m、0.60 m、深さ0.80 m、0.40 m、0.50 m、0.65 mと規模が大きく、P1・3・4には柱痕が認められることから、主柱穴と考えられる。P5は径0.55 m、深さ0.25 mで、入り口部の施設と考えられる。壁周溝は幅0.25～0.35 m、深さ0.05～0.10 mで、連続している。

遺物は多く、下層を中心に出土した。器種は、



第27図 第9号住居跡出土遺物

第10表 第9号住居跡出土遺物観察表 (第27図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	12.5	3.7	6.8	A E I J K	80	良好	灰	南比金産 鳩山HⅣ期 №13・20	14-8
2	須恵器	坏	11.9	3.4	6.6	E H I J K	95	普通	灰	南比金産 鳩山HⅣ期 №3	14-9
3	須恵器	坏	12.4	3.2	6.8	A E I K	75	良好	灰	南比金産 鳩山HⅣ期 №1・3	14-10
4	須恵器	坏	12.0	3.6	6.9	A E H I J K	90	普通	灰	南比金産 鳩山HⅣ期 №15	14-11
5	須恵器	坏	(12.0)	3.7	(6.4)	E H I J K	15	普通	灰	南比金産 鳩山HⅣ期 掘り方	
6	須恵器	坏	(12.4)	3.7	(7.7)	A E H I J K	25	普通	灰白	南比金産 鳩山HⅣ期 №4	15-1
7	須恵器	坏	—	0.7	(6.0)	A E I J K	45	良好	灰	南比金産	
8	須恵器	坏	—	1.6	(8.0)	E H I J K	30	普通	灰白	南比金産	
9	須恵器	坏	(12.6)	3.3	(9.8)	I J K	10	良好	灰	南比金産 鳩山HⅣ期 D-15G	
10	須恵器	坏	—	1.6	(6.0)	A I J K	20	良好	灰	南比金産 SD10	
11	須恵器	坏	—	0.8	7.8	A H I J K	70	普通	灰白	南比金産 鳩山HⅣ期～古期 内外面付着 №12	
12	須恵器	蓋	(17.9)	2.8	—	I J K	5	良好	灰	南比金産	
13	土師器	坏	(13.0)	2.3	—	A H I K	20	普通	橙	掘り方	
14	土師器	甕	19.6	27.7	5.4	A C E H I K	85	普通	にぶい橙	外面付着 №5	15-2
15	土師器	甕	(20.4)	11.6	—	A B C H I K	25	普通	にぶい黄褐	№6・7 カマド D-15G	15-3
16	須恵器	甕	—	4.8	—	I J K	5	良好	黒褐	南比金産 外面自然蝕 SD10	18-2

奈良時代の須恵器坏、蓋、瓶類、甕、土師器坏、甕、鉄滓である。この他に焼粘土塊、混入の近世陶磁器が出土している。第27図1～12は須恵器である。1～6・9は鳩山HⅣ期の南比金産の坏である。底面はいずれも周辺ヘラケズリである。12は南比金産の蓋で器高が高い。13～15は土師器である。13は北武蔵型坏である。16は南比金産の須恵器甕で、外面は平行タタキが施され、自然釉がかかる。内面は当て具痕がナデ消されている。荒川附Ⅶ期の古段階、8世紀後半と考えられる。

第10号住居跡 (第28・29図)

M区中央のC-18グリッドに位置する。遺構の中央が榊掛け状に調査区域外にかかり、覆土の上位は第1号道路跡に、西側は第13号土壌によって壊されている。特に遺構の東側は現代の基礎工事が確認面下まで及んでおり、覆土が遺存していなかった。

本住居跡は鍛冶炉が設けられ、重複する第13号土壌、第1号道路跡からも焼酎滓を含む多量の鉄滓が出土していることから、鍛冶工房と考えられる。

平面形態は長方形で、調査ではカマドは検出さ

れなかった。北東辺の軸方向はN-52°-Wである。規模は北西-南東方向5.20 m、北東-南西方向4.40 mである。深さは遺構の西側で0.10 mである。覆土はローム粒子、焼土を多く含む暗褐色土で、埋め戻しである。

床面は擾乱と重複によってかなり傷んでおり、貼床の有無は不明である。床面からは、鍛冶炉とそれに関連すると考えられる小穴(P1)、柱穴(P2)、壁周溝を検出した。

鍛冶炉と鍛造剥片、鉄滓が出土したP1は遺構の西側で検出した。鍛冶炉は第13号土壌によって大きく壊され、その壁面から検出した。規模は遺存部分で長径0.40 m、短径0.35 m、深さ0.20 mである。覆土は確認できず、東側の炉壁を検出したのみである。全体に粘土が貼付されており、被熱している。上層は還元して青灰色、下層は被熱のため赤褐色を呈する。P1は長径0.40 m、短径0.35 m、深さ0.25 mである。鍛造剥片・鍛冶滓が詰まった状態であった。P2は位置的には主柱穴と考えられるが浅く、断定には至らない。全体の掘り込みは長径0.70 m、短径0.30 m、柱穴と考えられる部分は長径0.40 m、短径0.30 m、深さ0.10 mである。壁周溝は幅

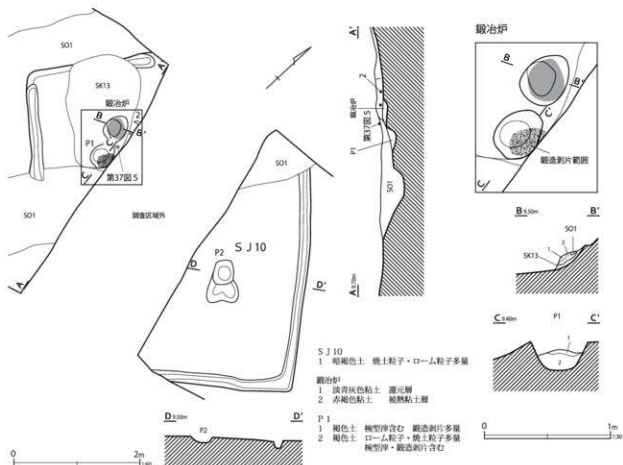
れるが、複数の遺構から出土しているため、別項にて示した。

本住居跡は、荒川附Ⅲ期、9世紀中葉から後半と考えられる。

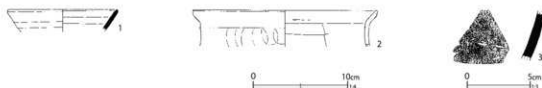
鍛冶関連遺物は、本住居跡と重複する第13号土壌、周辺の第7号土壌、第1号道路跡から出土している。本住居跡を中心とするものと考えら

M区南側のC・D-18・19グリッドに位置する。遺構の大部分が調査区域外にかかり、スリット状に西コーナーとカマドの燃焼部の一部が検出できたのみである。カマド周辺は第7・9号土壌に壊されており、全体の様相は不明である。

コーナーの様相から平面形態は方形と推定され



第28图 第10号住居跡



第29图 第10号住居跡出土遺物

第11表 第10号住居跡出土遺物観察表(第29図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	(11.8)	2.3	—	A E H I J K	10	普通	にぶい褐	南北金産 SK13	
2	土師器	甕	(19.8)	3.8	—	C H I K	10	普通	暗赤褐	No.1	
3	須恵器	甕	—	4.0	—	E I J K	5	良好	黄灰	南北金産	

る。カマドは北西方向に取り付く。カマドの位置から、南西壁の方向が主軸と考えられる。軸方向はN-44°-Wである。規模は不明だが、南西壁とカマドの間隔が3.5 mあることから、大型の住居となる可能性がある。深さは0.55 mである。覆土は調査範囲が狭いため不明瞭だが、ローム土を含む暗褐色土、褐色土で、自然堆積と考えられる。

カマドの全体の様相は不明である。検出できた部分は径0.25 m、深さ0.15 mのビット状で、形態的には奥壁に当たると考えられるが、位置的には壁の手前であることから断定には至らない。覆土の性格付けは困難だが、他の住居の様相から灰色粘土を含む2層はカマド掘り方の埋め土の可能性がある。壁周溝は幅0.40 m、深さ0.05 mである。

遺物は少なく、覆土中から出土した。器種は、奈良時代の須恵器坏、甕、土師器坏、甕、台付甕である。1は南北金産の須恵器甕である。褐色を呈する。2は土師器坏で、放射状暗文が施されている。荒川附Ⅶ期古段階、8世紀後半と考えられる。

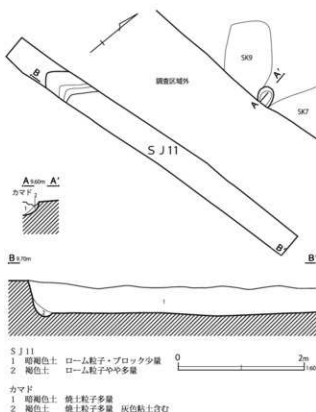
第12号住居跡(第32・33図)

N区東側のC-19・20グリッドに位置する。遺構の東側、中央、南側調査区域外で、スリット状に遺構の西側の一部が検出できたのみである。

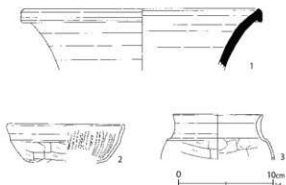
西壁と北西コーナーの様相から、平面形態は方形と推定される。カマドは検出していない。西壁の軸方向はN-4°-Eである。規模は調査範囲で、南北方向5.40 m、東西方向2.00 m、深さ

第12表 第11号住居跡出土遺物観察表(第31図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	甕	(25.7)	6.5	—	A E I J K	10	良好	灰黄褐	南北金産	
2	土師器	坏	(12.4)	4.1	—	A H I K	40	良好	にぶい褐	暗文	15-4
3	土師器	小型甕	(9.6)	4.8	—	A H I K	15	普通	灰褐	内外面煤付着	



第30図 第11号住居跡



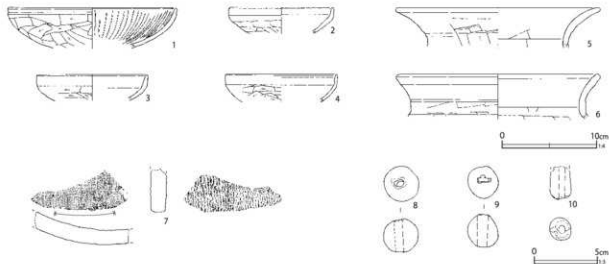
第31図 第11号住居跡出土遺物

0.40～0.50 mである。覆土はロームブロック、焼土、炭化物を含む暗褐色土、明褐色土、黒褐色土で、北側から数度にわたって土砂が大きく流れ込んでいる。2層はロームブロックを多く含み、埋め戻しと考えられる。

床面は貼床が施されていた。表面はロームブロック、暗褐色土を含む明褐色土の硬化面(7層)になっている。北壁沿いからは床下土壌を検出した。径0.60 m、深さ0.20 mで、ロームブロックを含む暗褐色土が充填されていた。

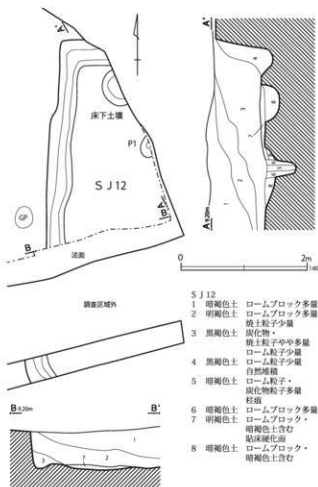
床面からは柱穴1基(P1)と壁周溝を検出した。P1は径0.30 m、深さ0.40 mと規模が大きく、柱痕が認められることから、主柱穴と考えられる。壁周溝は幅0.25～0.40 m、深さ0.05 mで、連続している。

遺物はやや多く、下層を中心に出土した。器種は、奈良時代の須恵器環、蓋、土師器環、甕、台付甕、瓦の転用磁具、土錘である。第33図1～6は土師器である。1は北武蔵型暗文環で、大型である。口縁端部は摘まれ、若干外反している。2～4は坏蓋模倣坏である。3は暗褐色を呈し、焼成が良く、硬質である。4は内外面を黒色処理されている。7は平瓦で、磁具として転用されている。胎土は針状物質、白色粒子、黒色粒子を含み緻密、焼成は良好で硬質である。南比企産か。



第33図 第12号住居跡出土遺物

一枚作りで、端面が部分的に残る。凹面は布目痕、凸面は長縄叩きである。8～10は土玉、土錘である。8・9は完形である。いずれもナデ調整で



第32図 第12号住居跡

- S J 12
- 1 暗褐色土 ロームブロック多量
 - 2 明褐色土 ローム粒子少量
 - 3 黒褐色土 炭化物・焼土粒子や多量
 - 4 黒褐色土 ローム粒子少量
 - 5 暗褐色土 ローム粒子・炭化物粒子多量
 - 6 暗褐色土 ロームブロック多量
 - 7 明褐色土 ロームブロック・暗褐色土含む
 - 8 暗褐色土 ロームブロック・暗褐色土含む

第13表 第12号住居跡出土遺物観察表 (第33図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(18.0)	4.2	—	H I K	25	普通	明褐色	内面暗文	15-5
2	土師器	坏	(11.0)	2.7	—	A C H I K	15	普通	橙		
3	土師器	坏	(11.8)	2.7	—	A H I K	15	良好	にぶい赤褐		
4	土師器	坏	(11.8)	2.9	—	A H I K	15	普通	にぶい赤褐		
5	土師器	甕	(21.5)	4.3	—	B C I K	10	普通	橙	内外面黒色処理	18-2
6	土師器	甕	(21.2)	4.7	—	A C E H I K	10	普通	橙		
7	瓦	平瓦	長さ4.5cm 幅10.2cm 厚さ1.6cm 布目25本×21本 縄タキ4本/cm						暗灰黄		
										生産窯不明 転用紙貝	18-8
8	土製品	土玉	径2.8cm 高さ2.7cm 孔径0.75cm 残存100%						重さ17.2g		18-2
9	土製品	土玉	径2.5cm 高さ2.6cm 孔径0.8cm 残存100%						重さ13.1g		18-2
10	土製品	土鉢	径1.8cm 長さ2.6cm 孔径0.6cm 残存50%						重さ6.1g		18-2

ある。9は孔から棒を引き抜く際にできた横長の掘れがそのまま残されている。本住居跡は、荒川附V期、7世紀末と考えられる。

第13号住居跡 (第34・35図)

D区中央のE-8・9グリッドに位置する。遺構の北側の大部分が調査区域外にかかり、南側は掘乱により壊されているため、スリット状に遺構の南側の一部が検出できたのみである。掘乱の南側に遺構が続かないことから、南壁は掘乱中に存在したと推定される。

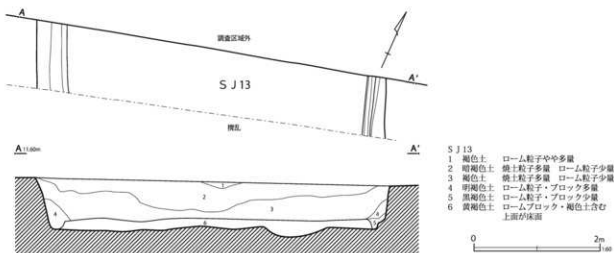
西壁の軸方向はN-25°-Wである。規模は東西方向5.50m、南北方向は調査区北壁と掘乱の間隔が1.05mである。深さは0.60mである。覆土はローム土、焼土を含む暗褐色土、褐色土、

明褐色土で、自然堆積である。

床面は貼床が施されていた。深さ20～25cmほどの掘り方が、ロームブロックと褐色土の混土層(6層)によって埋め戻されている。

床面からは壁周溝を検出した。東西で幅が大きく異なり、東側は0.15m、西側は0.50mである。深さは0.10mである。

遺物は少量で、覆土中から出土した。器種は、奈良時代の須恵器坏、蓋、土師器坏、皿である。第35図1・2は土師器である。1は北武蔵型坏、2は皿である。3は南比企産の須恵器甕である。外面は平行タタキ後ナデ、内面にもナデが加えられている。外面には全体に灰がかかる。荒川附VI期、8世紀初頭と考えられる。



第34図 第13号住居跡

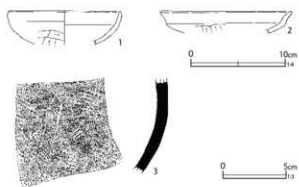
第14表 第13号住居跡出土遺物観察表 (第35図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(12.0)	4.5	—	A E H I K	20	普通	にぶい橙		
2	土師器	皿	(14.0)	2.3	—	A C E H I K	15	普通	にぶい褐		
3	須恵器	甕	—	7.6	—	A E I J K	5	良好	灰	南北全産	18-2

住居跡出土石製品 (第36図)

住居跡からは台石、砥石などの石製品が出土している。1は縄文時代、その他は古代と考えられ、住居跡に伴うと考えられる。

1は砂岩製の敲石で下半部は欠損する。棒状礫の上端部が敲打痕で潰れている。2～6は軽石製石製品である。僅かに擦痕が見られるのみである。4は上端部のみで、全体に被熱により赤みを帯びている。6は下端部のみ摩痕が見られ、平坦でス



第35図 第13号住居跡出土遺物

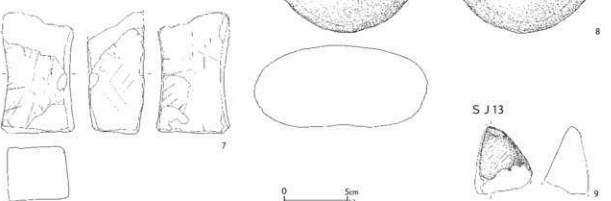
S J 1



S J 2



S J 9



第36図 住居跡出土石製品

タンブ状になっている。断面V字状の刃物痕が認められる。7は凝灰岩製の砥石で、上半部が欠損する。砥面は5面で刃物痕が多数見られる。8は安山岩製の台石である。一部が僅かに凹み白色化しているが、範囲が確定せず敲打によるものと

は断定はできない。僅かに擦痕が見られ、被熱により剥落し赤みを帯びている。9は安山岩製の磨石である。縁辺に敲打痕が見られ、平坦部は使用により平滑に摩耗している。全体的に被熱により赤みを帯びている。

第15表 住居跡出土石製品観察表 (第36図)

番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	図版
1	砥石	砂岩	(6.6)	(3.6)	2.4	79.6	SJ1	
2	軽石製の製品	軽石	(5.5)	(3.3)	3.0	18.7	SJ1	18-6
3	軽石製の製品	軽石	5.2	3.7	2.7	16.4	SJ1	18-6
4	軽石製の製品	軽石	(3.8)	(4.1)	3.6	23.8	SJ1	18-6
5	軽石製の製品	軽石	5.0	[3.9]	[2.4]	14.4	SJ1	18-6
6	軽石製の製品	軽石	4.7	5.1	4.3	39.1	SJ2	18-6
7	砥石	凝灰岩	(9.7)	5.8	4.6	352.6	SJ9	18-7
8	台石	安山岩	17.7	13.9	6.6	2269.7	SJ9	18-7
9	磨石	安山岩	(5.5)	(4.6)	3.5	80.2	SJ13	18-6

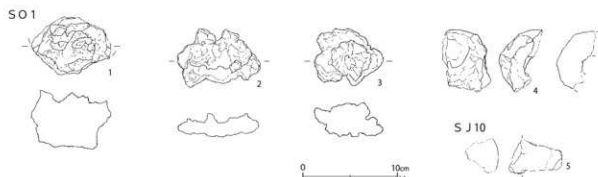
2. 鍛冶関連遺物

第21次調査では、調査区の遺構、グリッドから広範囲に鍛冶関連遺物が出土している。その分布は、焼失家屋である第9号住居跡と隣接する第8号住居跡、鍛冶工房跡である第10号住居跡と

その周辺の大きく2箇所に分かれる (第38図)。

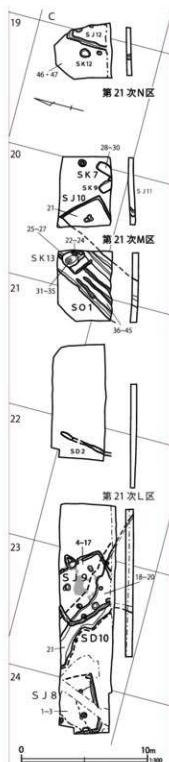
出土遺構、工程種別、種類、重量については第17表に示した。

遺構ごとの総重量は、第8号住居跡が201.9 g、



第16表 鍛冶関連遺物観察表 (第37図)

図版番号	遺物名	出土位置	計測値(cm)			重量(g)	備考	図版
			長さ	幅	厚さ			
1	炉底塊	SO1	8.5	6.0	6.1	380.5	炉底塊である。鉄屑が付着し、細かな気泡が多く見られる。外縁部は鋭い弧を描く。	17-6
2	鍛冶桶形滓	SO1	6.6	8.9	2.5	102.3	桶形滓である。上面に粒状滓が付着し、気孔が見られる。下面は溶化が進んでいる。	17-6
3	鍛冶桶形滓	SO1	6.0	7.4	3.6	118.9	桶形滓である。上面は層状になって高まりがあり、木炭痕が見られる。下面は気泡が多く見られ、鍛造剥片が付着する。	17-6
4	小口徑羽口	SO1	[5.2]	孔(2.6) 外(8.6)	2.5	87.2	小口徑羽口である。外面に溶解物が付着する。内面は還元し、断面は層状に赤化している。	17-6
5	羽口	SJ10	5.7	孔(2.0) 外(8.4)	3.3	48.1	小口徑羽口である。外面へラケズリ後ナデ、内面へラケズリである。外面の一部から内面全体にかけて被熱により赤変している。	17-6



第38図 鍛冶関連遺構

第9号住居跡関連が1536.8 g、第10号住居跡関連が1831 g、C-19グリッドが46.6 gである。

鉄滓には、製鉄関連の炉底滓、炉内滓と、鍛冶関係の椀形滓、鍛冶滓、羽口破片、鉄製品片、炉壁等があり、材料の鉄の搬入、鉄製品の製作、鉄

第17表 鍛冶関連遺物分類表

No	遺構名	工程種別	種類	磁着(g)	非磁着(g)	合計(g)	備考
1	SJ8	鉄製品	棒状品 釘か?	1.3	0	1.3	
2	SJ8	鍛冶	鍛冶滓	2.2	19.8	22.0	
3	SJ8	鉄塊	(鉄素材)	178.6	0	178.6	
4	SJ9	製鉄	炉底塊	0	221.4	221.4	No18
5	SJ9	製鉄	炉内滓・鉄滓	0	237.8	237.8	No16
6	SJ9		粘土	0	16.2	16.2	
7	SJ9	鍛冶	鍛冶滓	49.2	3.4	52.6	
8	SJ9	鉄製品		7.9	0	7.9	
9	SJ9		木炭	0	1.3	1.3	
10	SJ9	鉄塊		12.8	0	12.8	
11	SJ9	製鉄	炉内滓	0	16.5	16.5	
12	SJ9	製鉄	炉内滓	130.6	0	130.6	
13	SJ9	製鉄	炉内滓・鉄滓	14.5	0	14.5	
14	SJ9	製鉄	炉内滓	16.1	0	16.1	
15	SJ9	製鉄	炉底塊	436.5	0	436.5	No19
16	SJ9	製鉄	炉内滓・鉄滓	48.7	29.6	78.3	
17	SJ9	鍛冶	炉壁	0	47.5	47.5	
18		製鉄	炉内滓・鉄滓	44.7	1.8	46.5	
19	SJ9・SD10	鉄製品		15.0	0	15.0	
20		製鉄	炉内滓・鉄滓	185.3	0	185.3	
21	SJ10	鍛冶	鍛冶滓	28.9	0	28.9	
22		鉄製品		14.5	0	14.5	
23	SJ10 Pit1	鉄塊		68.9	0	68.9	
24		鍛冶	鍛冶滓	83.5	26.1	109.6	
25		鉄製品		4.2	0	4.2	
26	SJ10・SK13	製鉄	炉内滓	76.3	0	76.3	
27		鍛冶	鍛冶滓	19.7	0	19.7	
28	SK7	製鉄	炉内滓	36.4	0	36.4	
29	SK7	鉄塊		12.9	0	12.9	
30	SK7	鍛冶	鍛冶滓	0.9	1.2	2.1	
31	SK13	鍛冶	鍛冶滓	38.2	0	38.2	No8
32	SK13	鉄製品	刀子+不明品	5.8	0	5.8	
33	SK13	鍛冶	小口怪羽口	5.9	0	5.9	
34	SK13	鍛冶	鍛冶滓	47.7	0	47.7	
35	SK13	製鉄	炉内滓	23.4	0	23.4	
36	SO1	鍛冶炉	炉壁	0	18.8	18.8	
37	SO1	製鉄	炉内滓・鉄滓	29.0	104.0	133.0	
38	SO1	鍛冶	鍛冶滓	10.4	23.6	34.0	
39	SO1	鍛冶	椀形滓	100.0	153.5	253.5	
40	SO1	鉄塊		158.3	0	158.3	
41	SO1	鉄製品	不明品	80.7	0	80.7	
42	SO1	製鉄	鉄滓・炉底塊	0	380.5	380.5	第37図1
43	SO1	鍛冶	椀形滓	123.0	0	123.0	第37図2
44	SO1	鍛冶	椀形滓	118.9	0	118.9	第37図3
45	SO1	鍛冶	小口怪羽口	0	87.2	87.2	第37図4
46	C-19G	鍛冶	鍛冶滓	13.1	2.4	15.5	
47	C-19G	鉄塊		31.1	0	31.1	

滓の廃棄といった一連の工程が窺える。4・15は炉底塊で底面にスサ入りの粘土が付着し、破面(4:1面、15:3面)を持つ。11は炉内滓で、マグネタイト滓である。14は炉内滓で表面に黒煙化した木炭が残る。

また、鍛冶工房跡である第10号住居跡の覆土は全量取り上げ、洗浄し、総重量161.4 gの鍛造

剥片を採取した。なお、鍛造剥片の選別と資料の分析についてはⅥ-6で述べる。

3. 土壌

(1) 概要

土壌は調査区全体から14基を検出した。特にH区、M区東側、B・C-18・19グリッドに集中している。内訳は古代が6基、近世が8基である。時期の区分は出土遺物と覆土の状態により行った。検出位置、規模、長軸方向、重複関係については第18表に示した。古代の土壌の内第1・2・13号土壌の3基については、土器焼成域であるため次項で各説する。

古代の土壌は、大きくグリッド18・19列と9列付近に分布が分かれる。住居跡とほぼ同一の箇所に分布している。軸方向はまちまちである。

平面形は円形もしくは楕円形である。規模は長軸0.80～1.20 mで、深さは0.10～0.30 mである。多くの土壌の覆土はローム土を含む明褐色土、褐色土、暗褐色土の自然堆積である。第11号土壌は埋め戻しの可能性がある。遺物は土師器、須恵器の小破片がほとんどで、時期決定できるものがないが、底部周辺ヘラケズリの破片のみであることから、奈良時代に帰属する可能性が高い。

近世の土壌もほぼ同様の分布である。平面形はほとんどが丸みを帯びた長方形で、第3号土壌のみ不整楕円形である。軸方向は南北方向と東西方向がある。規模は長軸0.40～1.95 mで、1.30 m前後のものが多く、深さは0.10～0.55 mである。覆土はローム土を含む灰褐色土で自然堆積である。第4号土壌は埋め戻しの可能性がある。

すべての例が浅間A軽石を覆土中に含まずに、被覆されていることから、19世紀初頭以前には埋没していたと考えられる。

土壌出土の近世遺物はない。

(2) 土壌出土遺物 (第40図)

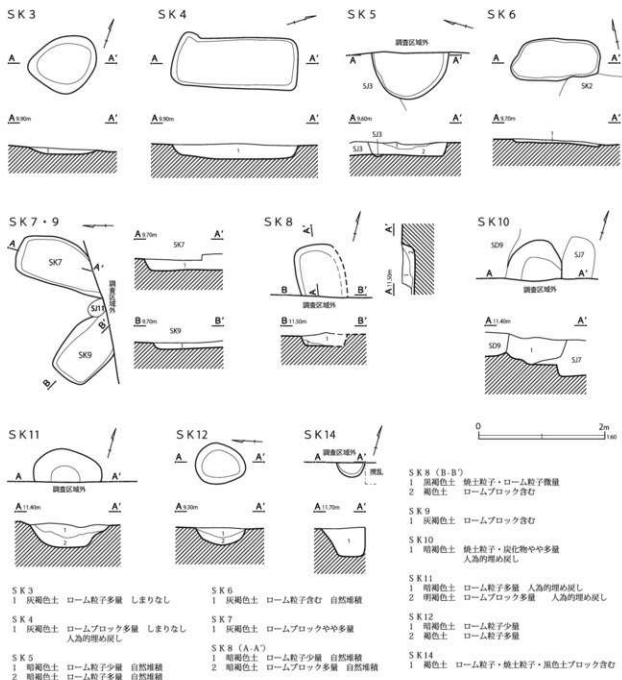
遺物は古代の土師器、須恵器の小破片である。時期が決定できる破片はほとんどなく、近世と考えられる土壌からも、混入で土師器、須恵器片が出土している。この他第7号土壌からは鉄滓が出土している。

第7号土壌出土遺物 1は南比企産の須恵器環である。浅黄色を呈し、ロクロ土師器の可能性があ

第18表 土壌一覧表 (第39図)

単位：m

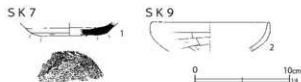
遺構名	時期	グリッド	重複	軸方位	長軸	短軸	深さ	断面形	平面形	遺物	備考
1号土壌											土器焼成域
2号土壌											土器焼成域
3号土壌	近世	B-19		N-54°-E	1.08	0.88	0.09	皿形	不整楕円形	土師器 須恵器	
4号土壌	近世	B-19		N-20°-E	1.96	0.80	0.23	皿形	長方形		
5号土壌	古代	B-19	SJ3(古)	N-22°-W	1.18	(0.73)	0.14	逆台形	円形		
6号土壌	近世	B-19	SK2(古)	N-76°-W	1.31	0.67	0.06	皿形	不整長方形		
7号土壌	近世	C-18・19	SJ11(新)	N-17°-E	(1.32)	0.80	0.54	逆台形	不整長方形	土師器 須恵器 鉄滓	
8号土壌	近世	E-7		N-18°-W	(0.83)	0.75	0.21	逆台形	長方形		
9号土壌	近世	C-18	SJ11(新)	N-48°-W	(1.10)	0.72	0.40	皿形	長方形	土師器環 鉄滓	
10号土壌 (近世)	F-10	SJ7(古)		N-86°-E	0.86	0.64	0.20	鍋底形	不整円形		
11号土壌	古代	F-9		N-70°-E	1.07	0.53	0.28	逆台形	不整円形	土師器環	
12号土壌	古代	C-19	SJ10(古) SD4(新)	N-3°-E	0.79	0.64	0.29	鍋底形	楕円形		
13号土壌											土器焼成域
14号土壌 (近世)	E-9			N-74°-E	0.42	0.22	0.10	逆台形	円形		



第39図 第3～12・14号土坑

第19表 第7・9号土坑出土遺物観察表 (第40図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	—	1.4	(6.0)	E H I J K	40	普通	浅黄	SK7 南比金産	
2	土師器	坏	(12.5)	3.1	—	A C I K	10	普通	橙	SK9	



第40図 第7・9号土坑出土遺物

る。底部周辺ヘラケズリである。

第9号土坑出土遺物 2は北武蔵型坏である。口縁部は直立する。荒川附VI期と考えられる。

4. 土器焼成墳

(1) 概要

土器焼成墳は3基検出した。分布箇所は他の土
墳と同様である。検出位置、規模、長軸方向、重

複関係については第20表に示した。

第1号土墳 (第41図)

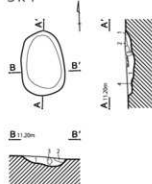
D区の東側、E-8・9グリッドに位置する。

第20表 土器焼成墳一覧表 (第41図)

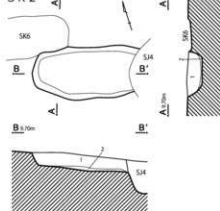
単位: m

遺構名	時期	グリッド	重複	軸方位	長軸	短軸	深さ	断面形	平面形	遺物	備考
1号土墳	古代	E-8・9		N-16°-W	1.00	0.67	0.19	皿形	楕円形	土師器甕 須恵 器環	
2号土墳	古代	B-19	SJ4(新)	N-70°-W	(1.52)	0.82	0.30	逆台形	長楕円形	土師器環	土サンプル 炭化物
13号土墳	古代	C-18	SJ10(古) SD4(新)	N-47°-W	1.99	1.13	0.46	杓子形	不整楕円形	土師器甕 須恵 器 羽口 丸瓦 礫石 鉄滓	

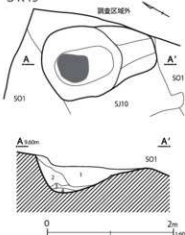
SK 1



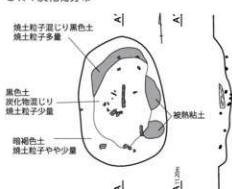
SK 2



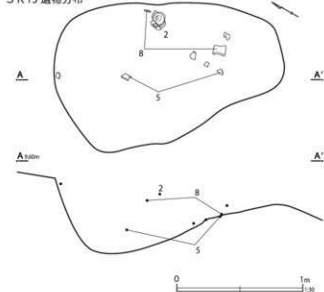
SK 13



SK 1 炭化物分布



SK 13 遺物分布



SK 1

- 1 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子多量
- 2 赤褐色土 ブロック状の焼土塊
- 3 黄褐色土 ロームブロック含む
- 4 暗褐色土 地山被焼土

SK 2

- 1 暗褐色土 炭化物ブロック・粒子含む ローム粒子少量 しまりあり
- 2 黒褐色土 炭化物ブロック多量 焼土粒子・ブロック少量 しまりあり

SK 13

- 1 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子やや多量 ローム粒子含む
- 2 褐色土 焼土粒子やや多量 ロームブロック多量 炭化物少量
- 3 黒褐色土 炭化物塊 焼土含む
- 4 黒褐色土 炭化物塊 焼土含む

第41図 第1・2・13号土墳

検出状況は焼土、炭化物が一面に広がった状態であった。覆土は炭化物を含む黒褐色土、焼土、ロームを含む黄褐色粘土で構成されている。各層に含まれる焼土はローム土が焼土化したものではなく、繊維状の炭化物を多く含む焼粘土である。スサ入り粘土の可能性が考えられる。炭化物は大型のものが多く、遺構全面に分布し、特に下層に多い。断面形は浅い皿状である。底面は凹凸があり、部分的に焼土化していた。遺物は土師器甕、南比企産須恵器環の小破片が出土している。

第2号土壌 (第41図)

H区中央、B-19グリッドに位置する。平面形は長楕円形である。底面に炭化物が一面に分布し、焼土が若干認められた。上層は炭化物を含む暗褐色土で、流れ込みである。断面形は逆台形である。底面は凹凸があるが、焼土化した部分は認められなかった。遺物は暗文環の小破片が出土した。本土壌の時期は、暗文環の出土と8世紀初頭の第4号住居跡に壊されることから、7世紀後半

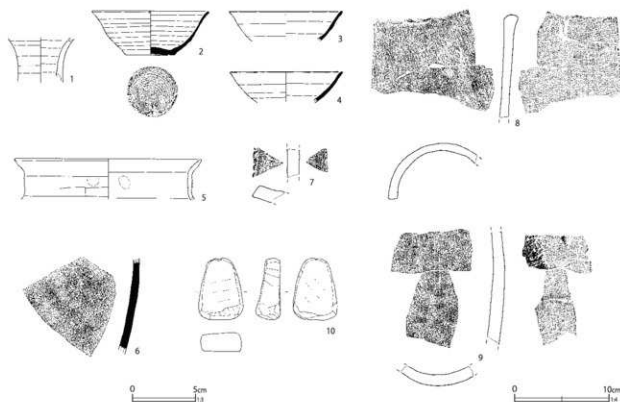
頃と考えられる

第13号土壌 (第41図)

M区の西側、C-18グリッドに位置する。第10号住居跡と重複し、鍛冶炉を壊しているため、覆土中から鉄滓が出土している。平面形は長楕円形(無花果形)である。検出状況は焼土、炭化物が全体に広がった状態であった。覆土上層は流れ込みで、焼土、炭化物を含む暗褐色土、褐色土である。最下層に焼土を混入する炭化物層が10cmほどの厚さで堆積していた。図中のトーンは炭化物の堆積範囲である。断面形は杓子形で、奥壁側は急角度、前壁側は緩やかに立ち上がる。底面は凹凸があるが、明瞭な被熱箇所は確認できなかった。

遺物は平安時代の須恵器環、甕、土師器甕、瓦、砥石、鉄滓が出土した。底面、下層から9世紀中葉の土師器甕、瓦が出土している。

1は狼投座の灰釉陶器長頸瓶である。灰白色を呈し、内面に灰がかかる。2~4は南比企産の須



第42図 13号土壌出土遺物

第21表 第13号土壌出土遺物観察表 (第42図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	灰釉陶器	長頸瓶	—	4.7	—	I K	10	良好	灰白	猿投産	15-6
2	須恵器	坏	12.4	4.6	5.5	E H I J K	80	良好	にぶい黄	南北金産 鳩山Ⅶ期 No4	
3	須恵器	坏	(12.0)	3.2	—	H I K	30	普通	灰白	南北金産	
4	須恵器	坏	(12.0)	3.3	—	A E H I J K	25	普通	黄灰	南北金産	
5	土師器	甕	(20.0)	4.3	—	A C H I J K	15	良好	明赤褐	No2・9	
6	須恵器	甕	—	7.6	—	E H I J K	5	普通	灰	南北金産	
7	瓦	平瓦	長さ3.0cm	幅3.5cm	厚さ1.3cm	布目24本×30本			灰白	南北金産	18-8
8	瓦	丸瓦	長さ10.8cm	幅9.6cm	厚さ0.9cm	布目22本×24本 縄タキ4本/cm			灰白	南北金産 No3・6	18-8
9	瓦	平瓦	長さ11.9cm	幅7.8cm	厚さ1.2cm	布目27本×21本 縄タキ6本/cm			灰黄	南北金産 SJ10	18-8
10	石製品	砥石	長さ5.0cm	幅3.6cm	厚さ2.0cm	重さ42.5g	凝灰岩			No1	18-6

恵器坏である。2は見込みの凹凸が著しい。鳩山Ⅶ期と考えられる。5は典型的なコノ字甕で、焼成が良く、硬質である。6は南北金産の須恵器甕である。器内が薄く、内面の当て具痕の径が小さいことから他の器種である可能性がある。7は平瓦、8・9は丸瓦である。胎土はいずれも針状物質、白色粒子、黒色粒子を含み緻密、焼成は良好で硬質である。南北金産である。7は端面が部分的に残る。端面と凸面はヘラケズリ後ナデが施さ

れる。内面は布目痕が見られる。8は基部が残存し、ナデによって仕上げられている。凹面は布目痕が、凸面は長縄タキ後ヘラケズリが施され、更にナデが加えられている。9は外周全体が欠失している。凹面は布目痕、凸面は長縄タキ後ヘラケズリ、ナデが加えられている。本遺構の時期は、8世紀後半の第9号住居跡を壊し、9世紀中葉の須恵器、土師器が出土することから、荒川附Ⅶ期に帰属すると考えられる。

5. 溝跡

(1) 概要

第21次調査では、中・近世の溝跡を9条検出した。各溝跡の概要は第22表に示した。中世の第9号溝跡を除き、いずれも近世に帰属する。調査区の全体に分布し、走行方向から地形の傾斜に合わせて掘削されたと推定される。

中世の溝跡は第9号溝跡のみである。調査区全体のほぼ中央に位置するが、比較的近い市調査第14・16地点でも該期の遺構は検出されておらず、他の遺構との関係は不明である。

近世の溝跡 (第43・44図) は調査区の全体に分布する。規模の大きなものはグリッド7列以西、グリッド14列以東に集中して分布している。溝の方向は、北北東—南南西方向 (第1・2・6号溝跡、23次第2号溝跡)、直交する東南東—西北

西方向 (第3・10号溝跡) と、南北方向 (第5・7・8号溝跡) の大きく三者がある。基本的には地形の傾斜に合わせて掘削されたと推定され、排水を意識していると考えられる。

規模は、幅0.4～0.6 m前後の細い第1・3・7・8号溝跡と、幅1.0～1.8 m前後の中規模の第6・10号溝跡、幅2.5～4.4 m前後の幅広の第2・5号溝跡の三者がある。深さは規模に対応し、細いものは0.1 m前後のごく浅いものが多く、中規模、幅広のものは0.4～1.0 mで、深く掘り込まれている。削平されている場合もあるため本来の規模そのままではない可能性もあるが、天明3年 (1783) の浅間A軽石を含んだ耕作土に大部分のものが被覆されることから、ある程度本来の規模に近いと考えられる。

第22表 溝跡一覧表(第43～45図)

単位: m

遺構名	時期	グリッド	重複	軸方位	長さ	幅	深さ	断面形	遺物	備考
1号溝	近世	F-5		N-13°-E	2.85	0.45 0.37	0.13 0.05	逆台形		幅(法面)0.66
2号溝	近世	C・D-16 B・C-17		N-24°-E	10.82	2.55 0.16	0.36 0.26	皿形	須恵器・環土 須恵器・近世陶器 須恵器・縄文土器 鉄滓	全長16.82
3号溝	近世	C-17		N-57°-E	2.23	0.58 0.45	0.03 0.04	皿形	土師器	
4号溝	近世	B-18 C・ D-17・18	S J 5 (古)・S J 10 (古)・S K 13 (古)	N-27°-E	10.52	4.36 3.20	0.75 0.19	不整形	近世陶磁器・焙烙・ 土師器・赤絵・德利 土師器・須恵器 土師	全長21.36 S O 1に変更
5号溝	近世	D・E-12		N-S	5.62	3.54 3.04	0.51 0.36	菜研	須恵器	幅(法面)3.90 全長11.38
6 a号溝	近世	E・F・G-6		N-6°-W	7.80	1.06 0.50	0.93 0.03	逆台形	須恵器・環土	全長14.62
		E・F・G-6		N-12°-E	破線 法面	1.02 —	0.17 0.12			
6 b号溝	近世	E・F・G-6		N-5°-E	8.04	0.96 0.62	0.20 0.15			全長14.72
		E・F・G-6		N-7°-E	破線 法面	1.5 —	0.15 0.09			
7号溝	近世	F-7		N-3°-E	3.44	0.50 0.27	0.06 0.03	皿形	土師器・環土	幅(法面)0.66
8号溝	近世	F-8		N-11°-W	2.90	0.44 0.26	0.27 0.08	箱形	土師器・須恵器 須恵器・近世焙烙	幅(法面)0.84 全長3.84
9号溝	中世	E・F-10		N-4°-E	2.68	0.74 0.46	0.12 0.06	皿形		幅(法面)1.16 全長3.77
10号溝	近世	D-15・16	S J 9 (古)	N-71°-W	8.46	1.78 1.02	0.44 0.14	逆台形	須恵器・環土	幅(法面)1.90 全長10.44

覆土はローム土を含む灰褐色土がほとんどで、暗灰褐色土、褐色土、暗褐色土、黄褐色土の例が認められる。全ての溝跡は覆土堆積後に、前述の火山灰を含んだ耕作土が被覆している。覆土中には火山灰は含まれておらず、これらの溝跡はいずれも天明3年以前の遺構で、それ以降はローム面に達する遺構は掘削されていないと考えられる。

溝跡のうち21次第2号溝跡、23次第2号溝跡は約20mの間隔があり、直交する第10号溝跡と合わせて、何らかの方形の区画溝を構成している。また第1号道路跡は第2号溝跡の東側約9mに平行しており、この区画溝との関係性が窺える。

以下、主要なものについて各説する。

第2号溝跡(第43図)

L区東側のC・D-16グリッド、G区東側のB・

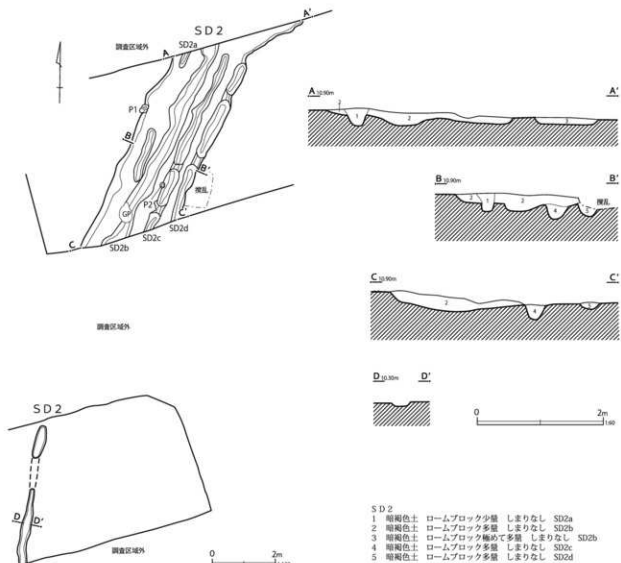
C-17グリッドに位置する。L区16列検出分については、相当の削平を受けているため基底の溝状の掘り込みを一部検出したのみである。

幅2.55mの掘り込みの底面に幅0.3～0.5m前後の掘り込みが4条認められる。SD2aとしたものについてはSD2bの2層を切り込んでおり、別遺構になる可能性がある。硬化面等は認められなかった。覆土はロームブロックを含む暗褐色土で、しまりを欠き、埋め戻しと考えられる。

瀬戸美濃の播磨の破片1点が出土したほかは、混入の縄文土器、土師器、須恵器の細片が出土したのみである。

第6号溝跡(第44・46図)

B・C区中央のE・F-6グリッド、I区西側のF・G-6グリッドに位置する。同様の溝跡2



第43図 第2号溝跡

条が近接して平行しており、一部に重複関係が認められることから、ほぼ同一箇所でも掘り直したと考えられる。覆土はローム粒子を含む灰褐色土で、自然堆積である。

出土遺物は少なく、混入と考えられる平安時代の須恵器環、甕の破片のみである。

第9号溝跡（第45図）

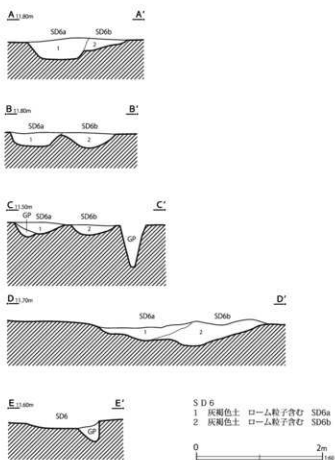
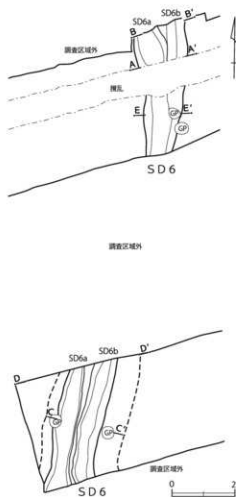
J区東側のE・F-10グリッドに位置する。中世の包含層から掘り込まれることから、同時期の遺構と考えられる。覆土は焼土・ローム土を含

む暗褐色土、褐色土で、埋め戻しである。

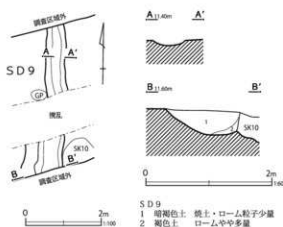
遺物は出土していない。

（2）溝跡出土の遺物（第46図）

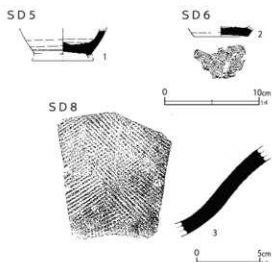
溝跡出土遺物で実測可能であったのはいずれも古代の遺物である。1は高台付長頸瓶と考えられる。2の坏は黄灰色を呈し、産地不明である。3の甕は底部周辺の破片で分厚く、タキ目が交叉している。1と3は南比企産である。



第44図 第6号溝跡



第45図 第9号溝跡



第46図 溝跡出土遺物

第23表 溝跡出土遺物観察表 (第46図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	長頸瓶	—	3.2	—	I J K	25	良好	灰	SD5 南比企産	15-7
2	須恵器	坏	—	1.1	(6.0)	E I K	50	普通	灰黄	SD6 産地不明	
3	須恵器	甕	—	7.3	—	A E I J K	5	良好	黄灰	SD8 南比企産	18-3

6. 道路跡

第1号道路跡 (第47・48図)

第21次調査では、道路跡を1箇所検出した。H区西側のB-18グリッド、M区西側のC・D-17・18グリッドに位置する。調査時は第4号溝跡として調査したが、遺構全体の中層に硬化面が認められることから、道路跡と判断した。

M区検出分については、第2号溝跡同様に相当の削平を受けているため基底の深い部分を検出したのみである。M区では鍛冶工場の第10号住居跡と重複するため、覆土中から鉄滓が多く出土した。法量や重複関係については第22表に示した。

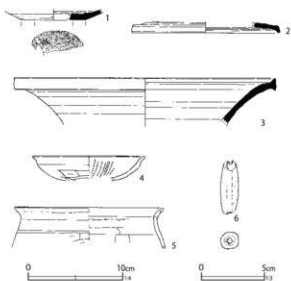
覆土は1・2層がローム土を含む暗灰褐色土で自然堆積、3・4層が硬化しており道路の硬化面、ロームブロックを部分的に多く含む5・7層が掘り方の埋め土と考えられる。6層は側溝の埋め戻し土と考えられ、硬化面がそれを被覆することから、路面の造り替えが推定される。

M区は幅3.50mの掘り込みの底面に、幅0.30m前後の細い溝状の掘り込みが認められる。所謂波板状遺構と考えられる。

出土遺物は多く、肥前系磁器の染付碗、赤絵徳

利、焙烙の破片が出土した。その他に混入の土師器、須恵器の細片、土鍾が出土している。

実測可能であったのはいずれも古代の遺物である。1・3は南比企産の須恵器である。2は湖西産の須恵器蓋で上面に灰がかかる。4は北武蔵型暗文坏で8世紀後半、5は定形化以前のコノ字甕で9世紀前半、6の土鍾は外面に螺旋状のナデが認められる。



第47図 第1号道路跡出土遺物

第24表 第1号道路跡出土遺物観察表 (第47図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	—	1.2	(7.0)	A E I J K	20	良好	灰白	SD4 南比企産	
2	須恵器	蓋	(15.6)	1.1	—	A I K	5	良好	灰白	SD4 湖西産	18-3
3	須恵器	甕	(28.0)	5.0	—	A H I K	5	普通	灰	SD4 南比企産	18-3
4	土師器	坏	(12.0)	3.6	—	A H I K	10	普通	橙	SD4 内面暗文	
5	土師器	甕	(16.0)	4.4	—	A C H I K	10	普通	灰褐	SD4 内外面煤付着	
6	土製品	土鍾	径1.4cm	長さ4.25cm	孔径0.4cm	残存90%	重さ8.7g			SD4	18-3

7. ビット

調査区全体からビットを 100 基検出した。グリッド 10 列以西の例が多く、特に I・J 区に集中して分布する傾向がある。これらの位置、規模、重複関係については第 25 表に示した。大部分のものは出土遺物がなく、時期区分は確定できないが、黒褐色の覆土のものを古代～中世、灰褐色の覆土のものを近世として表中に示した。柱痕が認められるものもあるが、間隔、深度等に規則性を欠いており、建物跡の柱穴や柵列ではないと考えられる。

平面形は円形もしくは楕円形で、径 0.20 ～ 0.50 m のものが大部分である。深さは 0.11 ～ 1.12 m と幅があるが、0.10 ～ 0.40 m のものが大部分である。

M 区 C-18 グリッド P 1 は規模が大きく、中層から土師器環、須恵器長頸瓶の破片が出土しており、古代に帰属すると考えられる。深度も 1.1 m ほどで深く、地鎮等の性格も考えられる。その他にも土師器、須恵器が出土しているものがあるが、規則性等は認められない。

出土遺物はほとんどが細片で、実測できたのは上述の M 区 C-18 グリッド P 1 から出土した 1・2 のみである。1 は東海産の須恵器長頸瓶で、高台が剥離している。底部は丸底で出尻状を呈する。内面は見込み部分が強くナゲ込まれ、段になっている。2 は北武蔵型の土師器皿で、内外面黒色処理が施されている。双方とも荒川附 VII 期と考えられる。

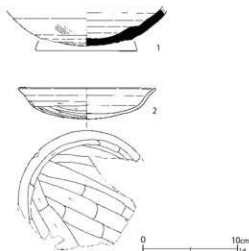
第 25 表 ビット一覧表

単位: m

区	番号	グリッド	長径	短径	深さ	備考	区	番号	グリッド	長径	短径	深さ	備考	区	番号	グリッド	長径	短径	深さ	備考	
A区	P 1	F-4	0.20	0.19	0.24	古代	F区	P 1	D-13	0.24	0.20	0.42	A群石 近世	J区	P 9	F-8	0.42	0.30	0.31	近世	
	P 2	F-4	0.38	0.30	0.14	古代		G区	P 1	C-16	0.32	0.32	0.20		近世	P 10	F-8	0.42	0.36	0.24	近世
	P 3	F-4	0.24	0.18	0.17	古代		P 1	C-17	0.54	0.40	0.87	近世		P 11	F-8	0.36	0.34	0.15	近世	
B区	P 1	F-5	0.41	0.39	0.45	古代	P区	P 2	C-17	0.36	0.32	0.35	古代	P 1	F-9	0.36	0.32	0.26	近世		
	P 2	F-5	0.36	0.32	0.30	古代		P 3	C-17	0.34	0.30	0.15	近世	P 2	F-9	0.30	0.30	0.19	近世		
	P 3	F-5	0.56	0.43	0.34	古代		P 4	C-17	0.40	0.05	-	近世	P 3	F-9	0.30	0.25	0.35	近世		
E-CK	P 1	E-6	0.20	0.14	0.16	柱痕 古代	H区	P 1	B-18	0.40	0.39	0.35	古代	P 4	F-9	0.30	0.26	0.30	近世		
	P 2	E-6	0.33	0.18	0.30	柱痕 古代		P 2	B-18	0.32	0.26	0.50	近世	P 5	F-9	0.35	0.18	0.41	近世		
	P 3	E-6	0.46	0.37	0.30	柱痕 古代		P 3	B-18	0.22	0.19	0.23	近世	P 6	F-9	0.37	0.27	0.34	近世		
P区	P 4	E-6	0.40	0.31	0.26	近世	I区	P 1	B-19	0.36	0.22	0.19	近世	P 7	F-9	0.32	0.24	0.29	近世		
	P 1	F-6	0.43	0.38	0.22	近世		P 2	B-19	0.32	0.28	0.50	近世	P8区	P 8	F-9	0.41	0.34	0.49	土師器環 須恵器環 柱痕 古代	
	P11	E-7	0.42	0.36	0.42	近世		P 3	B-19	0.32	0.30	0.23	近世		P 9	F-9	0.26	0.26	0.34	近世	
C区	P 1	E-7	0.39	0.29	0.29	古代	I区	P 4	B-19	0.42	0.42	0.21	近世		P 10	F-9	0.38	0.26	0.26	土師器環 古代	
	P 2	E-7	0.24	0.20	0.29	古代		P 1	F-6	0.44	0.39	0.37	近世	P 11	F-9	0.52	0.33	0.39	近世		
	P 3	E-7	0.26	0.16	0.23	古代		P 2	F-6	0.40	0.39	0.64	近世	P 12	F-9	0.54	0.28	0.33	近世		
P区	P 4	E-7	0.23	0.21	0.12	古代	P区	P 3	F-6	0.39	0.36	0.17	近世	P 1	E-10	0.30	0.26	0.41	土師器環 古代		
	P 5	E-7	0.22	0.19	0.17	古代		P 4	F-6	0.49	0.44	0.43	近世	P 2	E-10	0.28	0.27	0.35	近世		
	P 6	E-7	0.36	0.35	0.17	古代		P 5	F-6	0.47	0.44	0.14	土師器環 古代	P 3	E-10	0.26	0.24	0.22	近世		
P区	P 7	E-7	0.30	0.26	0.37	古代	P区	P 6	F-6	0.68	0.50	0.36	土師器環 古代	P 1	F-10	0.42	0.38	0.29	近世		
	P 8	E-7	0.45	0.34	0.52	古代		P 7	F-6	0.39	0.36	0.53	近世	K区	P 1	E-11	0.23	0.21	0.33	柱痕 古代	
	P 9	E-7	0.29	0.23	0.34	古代		P 1	G-6	0.43	0.40	0.07	近世		P 2	E-11	0.26	0.24	0.35	柱痕 古代	
D区	P 10	E-7	0.24	0.19	0.14	古代	I区	P 1	F-7	0.34	0.34	0.12	近世		P 3	E-11	0.29	0.28	0.35	柱痕 古代	
	P 1	E-8	0.28	0.26	0.13	古代		P 2	F-7	0.39	0.29	0.20	近世	P 1	E-12	0.30	0.22	0.28	古代		
	P 2	E-8	0.25	0.18	0.26	古代		P 3	F-7	0.34	0.30	0.17	近世	P 1	D-13	0.25	0.24	0.11	近世		
P区	P 3	E-8	0.24	0.22	0.25	近世	J区	P 4	F-7	0.32	0.26	0.10	近世	P 1	E-13	0.36	0.29	0.47	古代		
	P 1	E-9	0.34	0.28	0.28	近世		P 5	F-7	0.28	0.20	0.18	近世	P 2	E-13	0.28	0.28	0.36	古代		
	P 2	E-9	0.34	0.18	0.28	近世		P 1	F-8	0.30	0.10	0.21	近世	L区	P 1	D-15	0.36	0.34	0.57	土師器環 古代	
P区	P 3	E-9	0.44	0.39	0.29	近世	P区	P 2	F-8	0.28	0.26	0.17	近世		P 2	D-15	0.34	0.28	0.57	近世	
	P 4	E-9	0.29	0.20	0.14	近世		P 3	F-8	0.22	0.20	0.14	近世		P 3	D-15	0.20	0.16	0.30	近世	
	P 1	D-12	0.30	0.27	0.40	近世		P 4	F-8	0.34	0.30	0.17	近世	P 4	D-15	0.21	0.16	0.12	近世		
F区	P 2	D-12	0.35	0.15	0.31	近世	P区	P 5	F-8	0.42	0.38	0.22	近世	M区	P 1	C-18	0.60	0.53	1.12	須恵器長頸瓶 土師器環 古代	
	P 1	D-12	0.29	0.26	0.26	近世		P 6	F-8	0.38	0.32	0.24	近世		N区	P 1	C-19	0.46	0.27	0.42	近世
	P 2	D-12	0.15	0.15	0.19	近世		P 7	F-8	0.43	0.42	0.39	須恵器環 古代								
P区	P 3	D-12	0.26	0.24	0.34	近世	P区	P 8	F-8	0.43	0.32	0.20	近世								

第26表 ビット出土遺物観察表 (第49図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	長頸瓶	—	4.2	—	D E I K	40	普通	灰	C-18G P1 東海産	18-3
2	土師器	皿	(14.6)	3.3	—	A C H I K	70	普通	にぶい橙	C-18G P1 内外面黒色処理	15-8

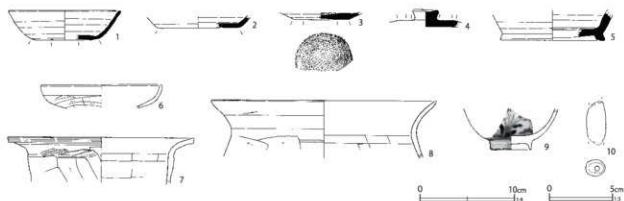


第49図 ビット出土遺物

8. グリッド出土の遺物

調査区全体から、表土掘削から遺構確認時に、早期から後期の縄文土器、古代の土師器環、甕、須恵器環、長頸瓶、甕、近世の陶磁器、土鍾、黒曜石が出土した。

1～5は南比企産の須恵器である。1・3は底面周辺ヘラケズリ、2は手持ちヘラケズリである。1・2は鳩山VI期と考えられる。6は北武蔵型環で、口縁部はほぼ直立する。内面と外面の口縁部に煤が付着する。7・8は武蔵型ケズリ甕で、7は口縁部に刀子が当たった痕跡が多く残る。9は肥前系磁器の染付碗で、外面草花文、高台に二重の圈線が施されている。10は土鍾で、粘土を複数回巻き付けてあり、その部分で剥離している。



第50図 グリッド出土遺物

第27表 グリッド出土遺物観察表 (第50図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	環	(12.0)	3.1	5.8	E H I J K	25	普通	灰	D区拡張部 南比企産 鳩山VI期	15-9
2	須恵器	環	—	1.3	(9.0)	I J K	30	良好	灰	D-15G 南比企産 鳩山VI期	
3	須恵器	環	—	0.9	6.0	E H I J K	50	普通	灰	D-15G 南比企産	
4	須恵器	蓋	—	1.8	—	E I J K	75	良好	灰	D-15G 南比企産 つまみ径2.8cm	
5	須恵器	長頸瓶	—	3.3	(11.2)	E H I J K	20	良好	灰	G-6G F-7G 南比企産	18-3
6	土師器	環	(12.9)	2.5	—	A I K	15	良好	にぶい赤褐	D区拡張部 内外面口縁部煤付着	
7	土師器	甕	(19.8)	5.0	—	A H I K	10	普通	橙	B-18G	18-3
8	土師器	甕	(24.0)	6.0	—	A C H I K	25	普通	にぶい赤褐	D-15G 外面煤付着	16-1
9	磁器	碗	—	4.2	(4.3)	I	30	良好	白	D-17G 肥前系磁器 18C後半 草花文	
10	土製品	土鍾	長さ13.5cm	径1.6cm	孔径0.4cm	重さ6.5g				F-8G	18-3

V 第23次調査の遺構と遺物

第23次調査では、奈良時代初頭の住居跡1軒、近世の溝跡2条、土壇2基、ピット19基を検出した。調査区は全体に確認面であるローム土付近

まで削平され盛土が施されていたため、第21次調査区で確認した包含層との関係は明らかにできなかった。

1. 住居跡

第23次調査では、奈良時代初頭の住居跡1軒を検出した。

第1号住居跡（第51～53図）

第23次東側調査区のC-16グリッドに位置する。第1号土壇にカマドの焚口部、燃焼部が壊されている。

平面形態は方形で、北カマドである。カマドを通る住居跡の中軸線方向（主軸）はN-2°-Wである。規模は主軸方向4.40m、直交する軸方向で4.30m、深さ0.40mである。覆土はローム土、焼土、炭化物を含む暗褐色土で埋め戻しである。5層は壁の崩落土である。

床面は灰白色粘土、明褐色土による貼床が施されていた。入口部からカマドにかけては、よく踏み固められ、硬化している。

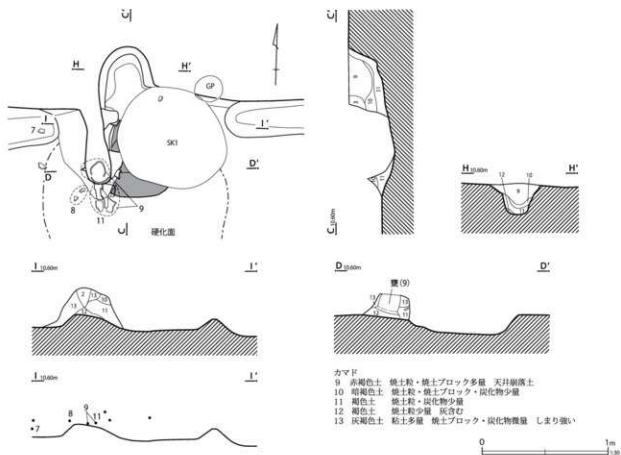
カマドは燃焼部が壁の外側に突出する。規模は全長1.20m、幅は第1号土壇に壊されているため不明だが、1.00m分を検出した。焚口部、燃焼部は一段深く掘り込まれ、褐色土(11層)が充填された上面に火床面が形成されていた。燃焼部は不整な楕円形を呈すると考えられる。火床面はあまり焼けず、左側壁面が焼土化し、良く焼けていた。覆土は3層がカマド流出土、9層が天井の崩落土である。灰層は不明瞭であった。袖(11～13層)は、灰が混入する褐色土(11・13層)に土師器甕(9)を構築材の芯とし、白色粘土を貼付して(13層)造られていた。内側が良く焼けていた。

床面からは柱穴4本(P1～4)と入口部の施設(P5)、小穴2本(P6・7)、壁周溝を検

出した。柱穴はP1からP4の順で、径0.45m、0.40m、0.50m、0.50m、深さ0.40m、0.30m、0.40m、0.30mと規模が大きく、いずれにも柱痕が認められる。P5は径0.45m、深さ0.40mで、入り口部の施設と考えられる。東壁際から2基の小穴を検出した。P6は径0.30m、深さ0.40m、P7は径0.25m、深さ0.25mである。壁周溝は幅0.20～0.50m、深さ0.05～0.20mで、連続している。

遺物は多く、下層から床面にかけて出土した。器種は、奈良時代の須恵器環、瓶類、甕、土師器環、甕、刀子である。この他に炭化種子が床面から、縄文土器が混入して出土している。第53図1～5は須恵器である。1は末野産、2は東海産、3・5は湖西産、4は南北企産である。1・2は坏で底面は全面回転ヘラケズリである。3は高台付坏である。出灰状態で、全面回転ヘラケズリである。4は回転糸切りの底部に高台が貼付されており新しい可能性がある。5は長頸瓶の肩部で自然釉がかかる。6～8は北武蔵型坏である。いずれも口縁部が直立する。7は内外面黒色処理され、8の口縁部外面は刷毛目状の工具で調整されている。9～14は武蔵型のケズリ甕である。13・14は色調、焼成が共通しており、同一個体の可能性がある。15は壺である。縦横のヘラケズリが施されている。雲母、角閃石、石英を含み、礫が多い特徴的な胎土で、系統は不明だが他地域のものと考えられる。16は刀子の刃部である。

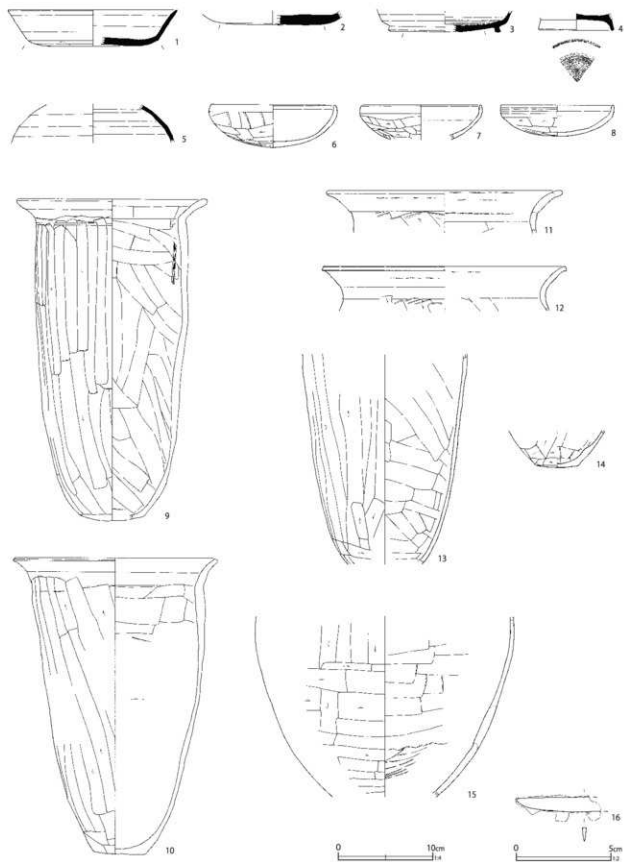
本住居跡の時期は荒川附VI期、8世紀初頭と考えられる。



第52図 第1号住居跡カマド

第28表 第1号住居跡出土遺物観察表 (第53図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	(18.2)	3.8	(12.6)	BEIK	25	良好	灰	末野産 №7	16-2
2	須恵器	坏	—	1.5	(11.1)	AHIK	10	普通	浅黄	東海産 №9	18-4
3	須恵器	高台付坏	—	2.3	(12.0)	EIK	30	良好	黄灰	湖西産 №1	16-4
4	須恵器	高台付坏	—	1.8	(8.0)	A1JK	20	良好	灰	南北企産	18-4
5	須恵器	長頸瓶	—	4.0	—	AHIK	10	良好	灰白	湖西産	18-4
6	土師器	坏	(13.2)	4.5	—	ACEIK	60	普通	橙	№4・5	16-3
7	土師器	坏	12.7	3.6	—	AHIK	60	普通	にぶい・橙	内外面黒色処理 カマド	16-5
8	土師器	坏	(12.0)	3.3	—	AIK	25	普通	橙	№23 カマド	17-2
9	土師器	甕	19.5	34.3	(6.9)	AHEIK	80	普通	にぶい・褐	内外面煤付着 №15・16	16-6
10	土師器	甕	21.3	31.5	5.5	AHEIK	70	普通	にぶい・赤褐	内外面煤付着 №12・13・14	16-7
11	土師器	甕	(25.0)	4.5	—	ACHIK	20	普通	にぶい・黄橙	№15	18-4
12	土師器	甕	(25.8)	4.8	—	AHEIKM	10	普通	橙	№21	18-4
13	土師器	甕	—	22.6	—	ACEHIK	25	普通	にぶい・褐	外面煤付着 №21 14と同一か?	17-3
14	土師器	甕	—	3.9	4.4	CIK	45	普通	褐灰	13と同一か?	17-3
15	土師器	壺	—	19.0	—	ACEHIK	15	普通	明黄褐	№3	17-1
16	鉄製品	刀子	長さ4.4cm 刀幅0.7cm 背幅0.2cm 重さ3.3g								



第53图 第1号住居跡出土遺物

2. 土壌

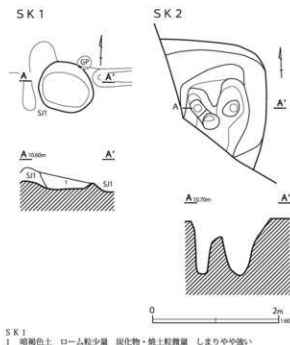
第23次調査では、近世の土壌2基を検出した。規模、軸方向、形態については第29表に示した。

第1号土壌 (第54図)

第23次東側調査区のC-16グリッドに位置する。第1号住居跡のカマド焚口部、燃焼部を壊して、掘り込まれている。覆土はローム粒子、炭化物、焼土を含む暗褐色土である。古代の須恵器環の破片が出土しているが、覆土の様相から近世に帰属すると考えられる。

第2号土壌 (第54図)

第23次東側調査区のC-15・16グリッドに位置する。方形で内側は不整形を呈するが規模が大きく、位置的に後述する第1号溝跡の先端部である可能性が考えられる。覆土からは小破片の状態で、古代の須恵器環、甕、瓶類、土師器の坏、甕、近世の常滑焼甕、在地系土器、平瓦が出土している。覆土は暗褐色土で、しまりを欠く。近世に帰属すると考えられる。



第54図 第1・2号土壌

第29表 土壌一覧表 (第54図)

単位: m

遺構名	時期	グリッド	重複	軸方位	長軸	短軸	深さ	断面形	平面形	遺物	備考
1号土壌	近世	C-16		N-85°-W	0.93	0.72	0.36	皿形	楕円形	須恵器環	
2号土壌	近世	C-15	S J 1 (古)	N-72°-W	1.60	1.56	0.92	方形	不整形	須恵器甕・坏 土師器甕・坏 近世平瓦・常滑 甕・絵柄	

3. 溝跡

第23次調査では、近世の溝跡2条を検出した。規模、軸方向、形態については第30表に示した。

第1号溝跡 (第55図)

第23次西側調査区のC-14・15グリッドに位置する。幅1.20mの溝跡が、位置を若干南側にずらして掘り込まれている。深さは確認面では0.30mほどだが、北側法面では1.60m前後が確認でき、本来相当規模の大きなものであったと推定される。

第2号溝跡を壊して掘り込まれており、第2号溝跡が、前述のように第21次調査区の溝跡と区

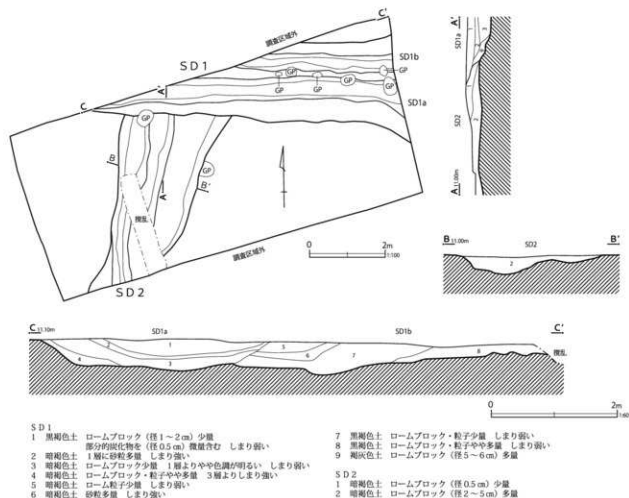
画溝を構成する可能性があることから、本溝跡はそれらより新しいと推定される。

第23次東側調査区の第2号土壌より北・東側には延びておらず、前述のように第2号土壌が溝の先端部である可能性も考えられる。

覆土はロームブロック、炭化物、砂粒を含む暗褐色土、黒褐色土で、しまりは均等でない。自然堆積と考えられる。近世の瀬戸美濃系陶器碗、肥前系磁器碗の小破片が出土したほかは、混入と考えられる古代の須恵器環、甕、瓶類、土師器環、甕の細片が出土したのみである。

第30表 溝跡一覧表(第55図)

遺構名	時期	グリッド	重複	軸方位	長さ	幅	深さ	断面形	遺物	備考
1号溝 a	近世	C-14・15	SD2(古)	N-89°-W	8.24	1.20	0.27	逆台形	須恵器甕・坏・瓶 土師器甕・坏 近世陶磁器	法面1.66
1号溝 b	近世	C-14・15		N-88°-W		0.90	0.16			
					1.18	0.26				
2号溝	近世	C・D-14	SD1(新)	N-10°-E	4.42	2.52	0.29	逆台形	土師器甕・坏 須恵器甕・坏 近世かわらけ	
						1.48	0.06			



第55図 第1・2号溝跡

第2号溝跡(第55図)

第23次西側調査区のC・D-14グリッドに位置する。第1号溝跡によって、東西に大きく壊されている。

その方向から第21次調査区第2・10号溝跡などとともに、何らかの区画を構成する可能性が考えられる。

西側は幅2.50 m、深さ0.30 mほどで、幅が広く深くなっている。

覆土はロームブロックを多く含む暗褐色土で、埋め戻しと考えられる。近世のかわらけの小破片が出土したほかは、混入と考えられる古代の須恵器坏、甕、土師器坏、甕の細片が出土したのみである。

4. ビット

調査区全体からビットを19基検出した。これらの位置、規模、重複関係については第31表に示した。大部分のものは出土遺物がなく、時期区分は確定できないが、土壌、溝跡同様の暗褐色の覆土で、近世と考えられる。間隔、深度等に規則性を欠いており、建物跡の柱穴や柵列ではないと考えられる。

平面形は円形もしくは楕円形で、径0.20～0.48 m、深さ0.08～0.70 mと幅があるが、0.10～0.40 mのものが大部分である。

出土遺物はほとんどが細片で、C-16グリッドP2から土師器甕の破片が出土したのみである。

第31表 ビット一覧表

単位：m

区	番号	グリッド	長径	短径	深さ	備考
23次	P1	C-14	0.48	0.36	0.39	
	P2	C-14	0.40	0.34	0.08	
	P3	C-14	0.37	0.28	0.20	
	P1	C-15	0.30	0.22	0.70	
	P2	C-15	0.48	0.37	0.61	
	P3	C-15	0.42	0.26	0.62	
	P4	C-15	0.38	0.32	0.15	
	P5	C-15	0.42	0.28	0.58	
	P6	C-15	0.39	0.29	0.20	
	P7	C-15	0.22	0.12	0.16	
	P8	C-15	0.28	0.22	0.12	
	P9	C-15	0.22	0.13	0.22	
	P1	C-16	0.20	0.20	0.44	
	P2	C-16	0.47	0.23	0.45	土師器甕
	P3	C-16	0.24	0.21	0.36	
	P4	C-16	0.26	0.23	0.29	SB1のP1から変更
	P5	C-16	0.40	0.27	0.32	SB1のP2から変更
	P6	C-16	0.21	0.20	0.65	SB1のP3から変更
	P7	C-16	0.44	0.40	0.63	

VI 第27次調査の遺構と遺物

第27次調査では、奈良時代の溝跡1条、土壌1基、ビット15基を検出した。調査区全体が南西側へ向かって傾斜しており、住居跡が検出されないことから集落域の南西端に当たるものと考え

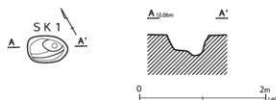
られる。全体に確認面であるローム土付近まで削平され、第21次調査区で確認した古代の包含層が薄く認められたのみである。

1. 土壌

第1号土壌 (第56図)

第27次調査区東側の27次A-4グリッドに位置する。長軸の方位はN-56°-Wである。規模は長軸0.55 m、短軸0.40 m、深さ0.25 mである。覆土はローム粒子を含む黒褐色土である。

遺物は出土していないが、覆土の様相から古代に帰属すると考えられる。



第56図 第1号土壌

2. 溝跡

第1号溝跡 (第57・58図)

第27次調査区中央の27次A・B-2・3グリッドに位置する。調査区を東西に横断する。規

模は幅1.15～1.55 m、深さ0.25～0.30 mで、地山の傾斜に合わせて掘り込まれている。周辺に多くのビットが分布しているが、本溝跡とは新旧

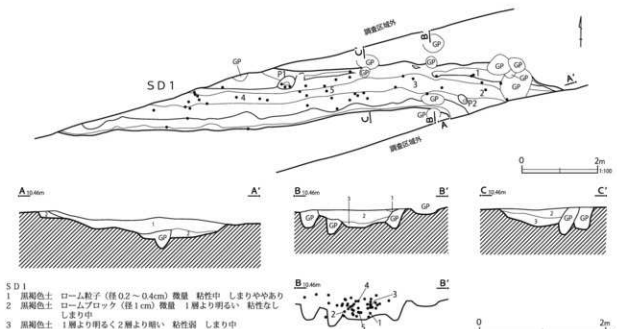
関係があり、施設として断定できない。

覆土はロームブロックを含む黒褐色土で、自然堆積と考えられる。奈良時代の須恵器環、甕、土師器の環、甕、骨片が出土した。

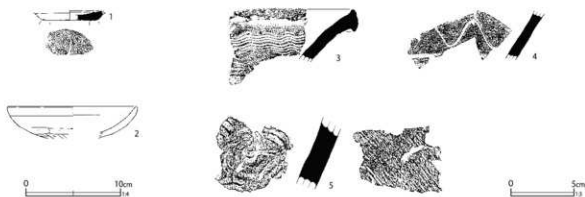
1・5は南比企産、3は末野産、4は湖西産の須恵器である。1は底面周辺ヘラケズリの坏底部

である。3の甕は6条1単位、2段以上の波状文が施されている。4の甕は1条の太い断面の丸い工具による波状文とその下位の沈線が認められる。2は土師器の北武蔵型環である。やや器肉が厚い。

本溝跡の時期は、荒川附VI～VII期と考えられる。



第57図 第1号溝跡



第58図 第1号溝跡出土遺物

第32表 第1号溝跡出土遺物観察表（第58図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	—	1.1	(6.2)	A E I J K	25	普通	灰	南比企産 No.42	18-5
2	土師器	坏	(13.8)	3.4	—	A B C I K	15	普通	橙	No.43	18-5
3	須恵器	甕	—	4.2	—	A B E I J K	5	良好	灰	末野産 No.38	18-5
4	須恵器	甕	—	4.0	—	H I	5	普通	灰	湖西産 No.13 南壁No.4	18-5
5	須恵器	甕	—	5.7	—	E H I J	5	普通	にぶい赤褐	南比企産 No.26	18-5

3. ピット

第1号溝跡周辺を中心にピットを15基検出した。これらの位置、規模、重層関係については第33表に示した。大部分のものは出土遺物がなく、時期区分は確定できないが、土壌、溝跡同様の黒褐色土の覆土であることから古代と考えられる。間隔、深さ等に規則性を欠いており、建物跡の柱穴や柵列ではないと考えられる。

平面形は円形もしくは楕円形で、径0.18～0.94 m、深さ0.09～0.73 mと幅があるが、径0.30～0.60 mのものが多く、他の調査区より大きめのものが多い。

出土遺物はP1・3・5から土師器坏、甕の小破片が出土したのみである。

第33表 ピット一覧表

単位：m

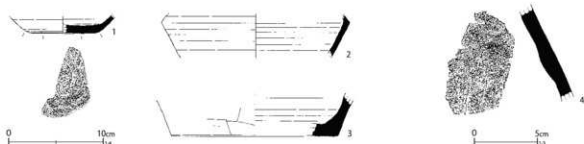
区	番号	グリッド	長径	短径	深さ	備考
27次	P 1	A-3	0.48	0.36	0.73	土師器甕
	P 2	A-3	(0.58)	0.54	0.56	
	P 3	A-3	0.18	0.13	0.35	土師器甕
	P 4	A-B-3	0.60	0.29	0.24	
	P 5	B-3	0.37	0.32	0.25	土師器坏
	P 6	A-3	0.58	0.37	0.49	
	P 7	A-3	0.94	0.76	0.49	
	P 8	B-2	0.42	0.34	0.12	
	P 9	A-3	0.56	0.48	0.04	
	P 10	A-3	0.48	0.10	0.15	
	P 11	B-2	0.58	0.54	0.09	
	P 12	B-2	0.36	(0.24)	0.21	
	P 13	A-3	0.42	(0.16)	0.23	
	P 14	A-3	0.30	0.28	0.26	
	P 15	A-3	0.30	(0.22)	0.30	

4. グリッド出土の遺物

調査区全体から、表土掘削から遺構確認時に、古代の土師器甕、須恵器甕、近世の陶磁器が出土した。

1～4は古代の須恵器である。1は東海産、2・

4は南比企産、3は末野産である。1は底面周辺ヘラケズリの大型の坏底部である。2は長頸瓶の肩部である。4の甕は平行タキ、当て具痕がナデ消されている。



第59図 グリッド出土遺物

第34表 グリッド出土遺物観察表 (第59図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	—	2.1	(8.0)	E H I K	20	普通	にぶい黄橙	北壁 東海産	18-5
2	須恵器	長頸瓶	—	4.7	—	I K	5	普通	灰	表土 南比企産	18-5
3	須恵器	甕	—	4.6	(17.6)	A B E H I K	10	普通	灰	表土 末野産	18-5
4	須恵器	甕	—	7.9	—	I J K	5	良好	灰	表土 南比企産	18-5

Ⅶ 調査のまとめ

1. 調査の成果

荒川附遺跡第21・23・27次調査では、住居跡14軒、土器焼成域3基、土壇14基、溝跡12条、道路跡1箇所、ピット134基を検出した。住居跡の時期は、古墳時代後期4軒（7世紀中葉～後半）、奈良時代9軒（8世紀前半5軒、8世紀後半4軒）、平安時代（9世紀中葉）1軒である。土器焼成域は、古墳時代～奈良時代2基、平安時代1基である。土壇は古代4基、近世10基、溝跡は奈良時代1条、中世1条、近世11条である。道路跡1箇所は、近世に帰属する。ピットは古代が52基、その他は近世である。

2. 集落の変遷

出土土器については富田和夫により『荒川附遺跡Ⅱ』において、古墳時代中期から平安時代までをⅠからⅧ期に分けている（富田2007）。今回の報告でもこの時期区分に従った。

出土土器の様相はこれまでの調査とほぼ同様である。須恵器はⅤ期（7世紀後半から8世紀初頭）では湖西産、東海産の製品で占められ、Ⅵ期ではこれらが客体的になり、南比企産、末野産が主体、Ⅶ期以降はほぼ南比企産となる。土師器はⅦ期の様相が不明瞭であったが、坏類の口径は小さく、器高は浅くなり、甕は武蔵型甕からコノ字甕への変遷が窺えるものとなっている。第11号住居跡2（第31図）は、第20次調査でも認められた赤熊浩一による本庄市古井戸・将監塚分類の坏Ⅰ類（赤熊1988）に当たる。組成の一角を占める可能性があり、采譜関係等が今後問題になる。

これまでに報告済みの資料は当事業団調査分175軒、蓮田市教育委員会調査分42軒、計217軒に上る。時期別の変遷はⅠ期（和泉式、5世紀）12軒、Ⅱ期（鬼高式初頭～前半、6世紀前半）15軒、Ⅲ期（鬼高Ⅱ式、6世紀後半）7軒、Ⅳ期（7世

紀前半～中頃）20軒、Ⅴ期（7世紀後半）51軒、Ⅵ期（8世紀前半）52軒、Ⅶ期（8世紀後半～9世紀初頭）17軒、Ⅷ期（9世紀中頃～後半）10軒、不明33軒である。Ⅲで述べたように、本集落は7世紀後半から8世紀前半のⅤ・Ⅵ期に最盛期を迎えるが、Ⅶ期から縮小傾向となり、Ⅷ期の9世紀後半にはほぼ終焉を迎える。集落構成の変遷は、大筋において富田が『荒川附遺跡Ⅱ』でまとめている。

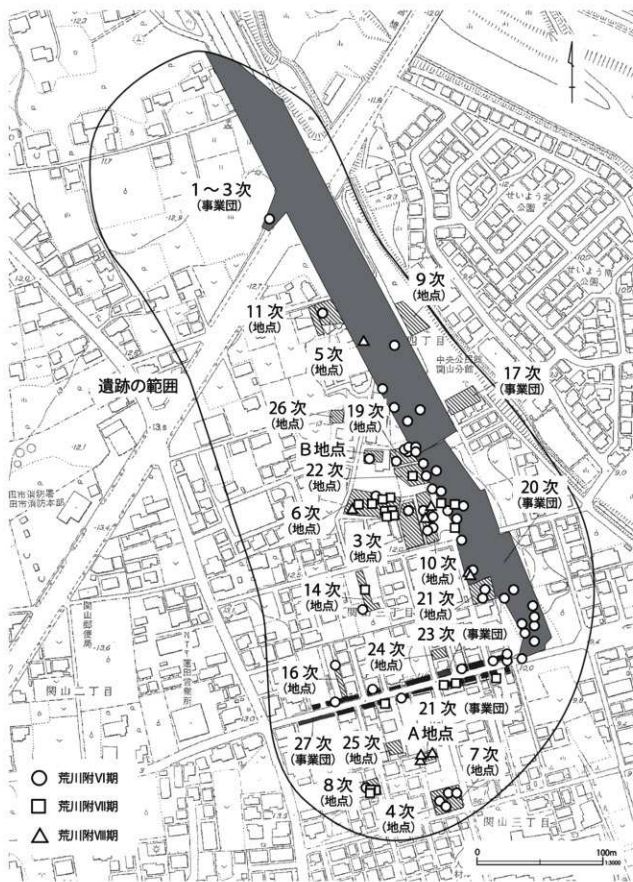
ここでは不明瞭であった第Ⅶ期以降の様相について述べる。本報告分と市教育委員会調査分を合わせたⅦ期の17軒は、遺跡の中央やや南側を中心に展開している。Ⅵ期までは長辺6～7mのやや大型と、長辺3～4mのやや小型のものの双方による大まかなまとまりが見てとれたが、Ⅶ期以降は規模も5.0m未満のものしかなく、富田が予想したように集落再編のあったことは明らかである。9世紀代には更に軒数が減少し、寺内正明が指摘するように、9世紀後半以降元荒川対岸の椿山遺跡に移動すると考えられる（寺内1989）。

一方、土器焼成域、竪穴関連遺構などは、本調査でも7世紀後半から9世紀前半まで継続して認められ、集落の再編を経ても、遺跡の性格が変わらないことを示している。

3. 土器焼成域について

第21次調査では、3基の土師器焼成を行ったと考えられる土器焼成域が検出されている。本遺跡では、Ⅲで述べたように市教育委員会第7地点、事業団第20次地点で14基検出されており、富田により「水深型焼成域」として検討されている。ほとんどの遺構は遺物が出土せず、時期は特定できないが、8世紀を中心とする7世紀から9世紀の生産が推定されている。

その中で、第21次調査第13号土壇は9世紀



第 60 図 荒川附遺跡Ⅵ～Ⅷ期の住居跡分布

中葉の遺物が多く出土し、集落の終息期である9世紀中葉まで、土器生産の継続が明らかになった点は重要である。第13号土壌は無花果形を呈し、奥壁側が急角度で立ち上がる。被熱部位は奥壁側底面に想定されるなど、富田が本遺跡において挙げた「水深型焼成域」の諸特徴と一致する。出土した遺物はいずれも被熱していないため、遺構との関係は不明瞭である。

一方、第21次調査第1号土壌は、上部が削平され本来の形状を保っていない可能性もあるが、平面形は長楕円形を呈し、規模は1.0 mと小さい。被熱箇所は側壁側で一定の広がりを持ち、覆土にスサ入り粘土の焼土を多く含むなど、「水深型焼成域」とはいささか様相を異にする。富田は「水深型焼成域」のほかに、神川町皂樹原・楡下遺跡を例に、平面形が長楕円形となる類型を「皂樹原・楡下型」として仮称している。確認面の問題から確実ではないが、第20次第12号土壌も長楕円形を呈しており、第21次第1号土壌と同様と思われる。今後更に検討の必要があるため、ここでは両類型が存在する可能性を指摘するに留めたい。

4. 鍛冶関連遺物について

本遺跡では土器生産と時を同じくして7世紀後半から9世紀中葉に、鉄製品の生産が行われている。これまでの調査における鍛冶関連遺物の出土遺構と時期を第35表にまとめた。現在までに出土している遺物は、第21次調査分(第17表)と合せて製鉄関連の炉底塊1,038.4 g、炉内滓4,207.45 g、鉄塊系遺物617.79 g、炉壁1,803.62 g、計7,667.26 g、鍛冶関連の椀形滓19,641.73 g、鍛冶滓2,390.30 g、鞆羽口6,094.76 g、鞆の破片と考えられる粘土溶解物296.43 g、計28,423.22 gである。後述する鍛造剥片については、今回初めて回収作業を行い161.4 gを得た。

精錬を直接物語る遺構は検出されていないが、

第35表 荒川附遺跡の鍛冶関連遺物(第58図)

次数	遺構名	期	工程箇所	種類	合計(g)	備考
事20	S J 34	I	製鉄	炉壁	390.64	
事20	S J 7	II	鍛冶	椀形滓	92.01	
事20	S J 61	II	鍛冶	椀形滓	32.34	
事20	S J 5	III	製鉄	鉄塊	26.61	
事20	S J 18	III	製鉄	炉内滓	141.19	
事20	S J 10	IV	鍛冶	フィゴ羽口	31.53	
事20	S J 10	IV	鍛冶	椀形滓(3)	397.00	
事20	S J 55	IV	鍛冶	椀形滓	61.64	
事20	S J 56	IV	鍛冶	羽口	62.53	
事20	S J 56	IV	鍛冶	椀形滓	872.83	
事20	S J 9	V	鍛冶	椀形滓	54.79	
事20	S J 27	V	製鉄	炉壁(製錬炉・縦形)	1116.25	
事20	S J 33	V	製鉄	炉壁片	18.16	
事20	S J 57	V	鍛冶	粘土溶解物	94.60	
事20	S J 57	V	鍛冶	椀形滓	181.98	
事20	S J 59	V	製鉄	炉内滓	110.30	
事20	S J 60	V	鍛冶	椀形滓	1675.68	
事20	S J 60	V	鍛冶	フィゴ羽口	53.74	
事20	S J 60	V	鍛冶	粘土溶解物	185.43	
事20	S J 65	V	鍛冶	椀形滓	210.49	
事20	S J 65	V	鍛冶	フィゴ羽口	19.72	
事1-3	S J 81	VI	鍛冶	羽口・鉄滓・砥石		
事20	S J 1	VI	鍛冶	フィゴ羽口	52.45	
事20	S J 1	VI	製鉄	炉内滓(製鉄)	1002.40	
事20	S J 1	VI	製鉄	鉄塊	46.44	
事20	S J 1	VI	製鉄	炉壁(1)	95.50	
事20	S J 6	VI	製鉄	鉄塊	81.84	
事20	S J 12	VI	鍛冶	フィゴ羽口	14.59	
事20	S J 13	VI	鍛冶	フィゴ羽口	37.95	
事20	S J 14	VI	鍛冶	椀形滓	155.46	
事20	S J 16	VI	製鉄	炉内滓	745.44	
事20	S J 19	VI	鍛冶	椀形滓	108.01	
事20	S J 20	VI	製鉄	炉内滓	90.74	
事20	S J 22	VI	鍛冶	フィゴ羽口	4.15	
事20	S J 22	VI	製鉄	炉内滓	75.83	
事20	S J 24	VI	鍛冶	椀形滓	199.40	
事20	S J 29	VI	製鉄	炉内滓	100.72	
事20	S J 44	VI	製鉄	炉壁片	116.76	
事20	S J 44	VI	製鉄	(鉄塊系)炉内滓	568.89	
事20	S J 63	VI	鍛冶	羽口	5725.00	
事20	S J 63	VI	鍛冶	椀形滓	15104.70	
市2	B区住居址	VI	鍛冶	鉄滓ブロック		
市6	S J 15	VI	製鉄	鉄塊(289)・鉄滓(177)		鍛冶工房
市6	S J 16	VI	製鉄			鍛冶工房
事20	S J 11	VII	製鉄	炉内滓(1)	377.40	
市6	S J 10	VII	製鉄	鉄塊・鉄滓		
市6	S J 11	VII	製鉄	鉄塊(5)・鉄滓(10)		
市6	S J 12	VII	製鉄	鉄塊(1)・鉄滓(3)		
市6	S J 13	VII	製鉄	鉄塊(3)・鉄滓(5)		
市6	S J 17	VII	製鉄	鉄塊(161)・鉄滓(44)		
市22	S J 90	VII	鍛冶	鉄滓(127)	2020.00	鍛冶工房
市6	S J 19	VII	製鉄	鉄塊(2)・鉄滓(3)		

豎形炉に関わる炉壁や炉底、炉内滓などが出土している。第21次調査出土の炉底塊は小割にされ、材料化されたもので、消費地における形態と考えられる。本遺跡における鍛冶関連遺物は、近傍に存在する製鉄遺跡から素材が搬入され、小鍛冶が行われた結果と位置付けられる。

鍛造剥片の検討から2段階以上の工程が想定されるが、具体的な工程の解明は今後の課題となる。

時期別の出土総重量はⅠ期390.64 g、Ⅱ期124.35 g、Ⅲ期167.8 g、Ⅳ期1,425.53 g、Ⅴ期3,721.14 g、Ⅵ期24,326.27 g、Ⅶ期4,255.5 g、Ⅷ期317.9 gである(註1)。Ⅰ期の遺構から炉壁が出土するなど、鍛冶工場のほかは遺構に伴わないと考えられるが、それでもⅥ期は著しく多く、生産の隆盛を窺わせる。住居跡の軒数に対する出土遺構の割合も同様の傾向を示し、Ⅵ期が42%、Ⅶ期が58%と高い。

推定ではあるが、本遺跡では奈良時代を中心に鉄器生産が行われていたと考えられる。

5. 遺跡の性格

荒川附遺跡の性格については、既に富田によって古代埼玉(郡)の手工業生産を担った集落として位置付けられている。特に土器生産、鉄器生産の双方が行われ、近傍に製鉄遺跡の存在が想定される点は、まさに手工業生産の中心を担っていたことを物語っている(註2)。

この背景には元荒川の存在が欠かせない。富田が推定する舟運による川津的な機能とともに、砂鉄の黒に由来するとされる「黒浜」の地名が示す豊富な川砂鉄や、河畔の露頭における粘土の存在などである。土鍾などから知られる漁具のみでなく、黒浜貝塚などでは、縄文時代以来、硬砂の露頭からの採取が行われている。そうした活動を通して砂鉄の存在も知られていたであろう。

川魚を獲り日々の糧を得るのみでなく、粘土や砂鉄、硬砂の採取、舟運と、荒川附遺跡は母なる

元荒川の恵みを享受した手工業生産遺跡として、改めて位置付けられるのである。

6. 鍛造剥片について

荒川附遺跡の第10号住居跡は、調査時に覆土中から鍛造剥片が検出されたため、鍛冶工房であると考え、関連資料を得るために覆土を採取した。採取方法は床面付近の覆土を一括し、採取量はコンテナに5箱分程度とした。

操作 採取土壌に対して以下の操作を行った。

①風乾した土壌をボールに取り、水を加えて攪拌し、上澄みを流すデカンテーション操作を10～20回程度繰り返して、粘土分を除去した。

②ボールの底に残った鍛造剥片が含まれた砂を取り出して、紙を敷いたザルの上で風乾した。

③磁石(PUP-M)を使用して、砂の中から磁着する成分(鍛造剥片、磁鉄鉱等)を抽出した。

④標準篩(第36表)で、粒度別に篩別した。

⑤篩上の試料メッシュ3.5～7.5については、肉眼で鍛造剥片と粒状滓を砂から選別した。

⑥同様に8.6～18.5については、重液分離を行い、砂分と鍛造剥片等を分離した。

⑦分離した試料をアセトン洗浄後、風乾した。

⑧⑦の試料について、肉眼で鍛造剥片中から粒状滓を分離した。

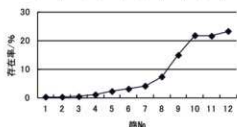
⑨分離された鍛造剥片と粒状滓を秤量した。

結果 秤量結果を第36表に示し、鍛造剥片の質量分布を第61図に、粒状滓の質量分布を第62図に示した。

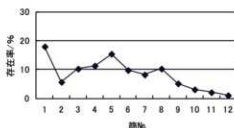
考察 試料は一括して取上げられているため、作業内容と住居内の位置との関係について議論できない。また特殊な形状の試料であるため篩別作業には適さず、数値には相当な誤差が含まれている。鍛造剥片の篩別分隔毎の存在率を見ると8番(#10 1.7 mm)から急激に上昇し、特に10番(#14 1.18 mm)以降でピークに達することから、この大きさ以下の抽出が必要である。

第36表 抽出した鍛造剥片と粒状滓の粒度別質量

番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
メッシュ	3.5	4	4.7	5.5	6.5	7.5	8.6	10	12	14	16	18.5
鍛造剥片/g	0.4	0.4	0.6	1.7	3.6	4.9	6.6	11.8	24	35.1	34.8	37.5
存在率/%	0.25	0.25	0.37	1.05	2.23	3.04	4.09	7.31	14.9	21.7	21.6	23.2
粒状滓/g	3.5	1.1	2	2.2	3	1.9	1.6	2	1	0.6	0.4	0.2
存在率/%	17.9	5.64	10.3	11.3	15.4	9.74	8.21	10.3	5.13	3.08	2.05	1.03



第61図 鍛造剥片の粒度別質量分布



第62図 粒状滓の粒度別質量分布

粒状滓の篩別分隔毎の存在率を見ると、№6、7付近の落ち込みを無視するとしても、#1付近と、#5付近にピークが見られるバイモーダルな形状を示しており、両者は異なった作業工程に由来する可能性が指摘できる。

註1 第21次調査土壌、道路跡、グリッド分は除外した。
 註2 土器、鉄器の生産が行われ、近傍に製鉄遺跡が存在する例として富田は皂樹原・楡下遺跡を挙げている。上

尾市大山遺跡や白岡市タタラ山遺跡周辺など、製鉄関連遺跡周辺にこうした一連の手工業生産を行う遺跡が存在する可能性を、今後考慮する必要があるだろう。

引用・参考文献

- 青木文彦 2002『府内三丁目遺跡1』岩槻市遺跡調査会
 赤熊浩一1988『狩獵塚・古井戸 歴史時代編Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第72集
 大塚孝司 1984『江ヶ崎貝塚、荒川附遺跡』蓮田市文化財調査報告書第6集 蓮田市教育委員会
 大塚孝司 1988『荒川附遺跡』蓮田市遺跡調査会調査報告書第3集 蓮田市遺跡調査会
 木戸春夫 1992『荒川附遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第112集
 小宮雪晴 2009『荒川附遺跡—第14調査地点・第16調査地点・第17調査地点—』蓮田市遺跡調査会
 小宮雪晴・田中和之 2007『帆立山遺跡—第3調査地点— 殿の下遺跡—第2調査地点— 荒川附遺跡—第19調査地点—』蓮田市文化財調査報告書第44集 蓮田市教育委員会
 小宮雪晴・田中和之 2008『鶴山貝塚—第4調査地点— 根金大山遺跡—第2調査地点— 荒川附遺跡—第21調査地点—』蓮田市文化財調査報告書第45集 蓮田市教育委員会
 小宮雪晴・田中和之 2009『久台遺跡—第9調査地点— 荒川附遺跡—第22調査地点—』蓮田市教育委員会
 瀧瀬芳之・野中仁 1995『埼玉県内出土土象徴遺物の研究』『研究紀要』第12号 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
 田中和之 1989『荒川附遺跡—第7地点・第8地点— 宿下遺跡—第6地点—』蓮田市教育委員会
 寺内正明 1989『荒川附遺跡—第6次調査—』蓮田市遺跡調査会調査報告書第4集 蓮田市遺跡調査会
 寺内正明・田中和之 1991『荒川附遺跡—第9調査地点—』蓮田市遺跡調査会調査報告書第7集 蓮田市遺跡調査会
 寺内正明 1992『荒川附遺跡—第10調査地点—』蓮田市遺跡調査会調査報告書第17集 蓮田市遺跡調査会
 寺内正明 1996『荒川附遺跡—第11調査地点—』蓮田市遺跡調査会調査報告書第25集 蓮田市遺跡調査会
 寺内正明 1989『梅山遺跡—第3・4次調査—』蓮田市文化財調査報告書第13集 蓮田市教育委員会
 富田和夫 2007『荒川附遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第338集
 野中松夫 1981『的場 八番 荒川附遺跡』蓮田市文化財調査報告書第2集 蓮田市教育委員会
 野中松夫 1983『江ヶ崎貝塚 御殿場遺跡 荒川附遺跡』蓮田市文化財調査報告書第5集 蓮田市教育委員会
 蓮田市文化財展示館 2012『蓮田市の生き立ち いかにしえの足跡から市制施行40周年まで—』蓮田市教育委員会
 山本 靖・瀧瀬芳之ほか 2008『神ノ木2遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第349集